
IS インフィニット・ストラトス 胡蝶の夢 人の夢

白眉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 胡蝶の夢 人の夢

【Nコード】

N8940S

【作者名】

白眉

【あらすじ】

これは、自らに定められた使命のために、己の存在意義をかけて戦う、一人の少年の物語。

これは、守りたいものを守るため、再び大空を飛ぶことを決意した、一人の少女の物語。

これは、大切な物のために戦う、少年少女の物語

プロローグ

IS 正式名称 インフィニット・ストラトス。

本来宇宙空間での活動を想定し開発されたそれは、一人の科学者が引き起こした事件をきっかけに、急激な方向転換を迎える。

戦車や戦闘機では相手にならないほどの実力を発揮して見せたISは、瞬く間に各国家の戦力誇示の要へと変わっていった

夜。

巨大な月が、昼間の太陽に代わって、その青白い光を下界へと降り注ぐ時間

そんな月明かりに照らし出された雲の上で、激しい衝突を見せる4つの影……。

一つは、まるで獣の骸骨の様な、鋭い爪をもち。

一つは、植物の蔦の様な触手を両腕から伸ばし。

一つは、紫色の甲冑のような姿と、繋がっていない巨大な拳を左右に浮かばせ。

いずれも、どこか生物的な、しかし全く生氣の様なものを感じられない、どこか歪な存在。

そして、この3つの影に対峙するかのように飛び交う、もう一つの影。

全体的に黒を基調としたそれは、人の形をしていた。

と言っても、あくまで人の様な大の字の形に似ていると言っただけで、決して人間の様な姿をしている訳ではなく。

むしろそれはロボットなどのそれに近い。

脚部は白のラインが走る装甲に覆われ、後ろ側からは翡翠色の光の粒子を放っている。

脚部の装甲は足の付け根あたりまで伸び、そこから先は途切れ、腹部の中央辺りからまた黒色の装甲に覆われている。

胸部には何かが内蔵されている様な、特徴的な茶色の突出物が付いている。

両肩には、まるで覆うように取り付けられた巨大なウイング状のパーツが付けられている。

さらに背面部には、何かの武器だろうか？まるで背ビレを連想させる様な黒色の突起が4つ。

極めつけは頭部。ここも黒色で形成され、ヘルメットの様なフルフェイスに、翡翠色のアイカメラが二つと二本の角の様な装飾が施されている。

黒色のロボットは、叩き落とさんと伸びてくる触手や、鋭利な爪による猛攻をかいくくりながら、右手を異形へと向ける。

すると、光の粒子が集まったかと思えば、その右手に長銃ライフルが握られる。

黒色に光るフレームに、縦二つに並んだ銃口。

その切先が射線上の異形と重なった瞬間、銃口から硝煙と翡翠の閃光が飛び散る。

放たれた銃弾と翡翠の光弾はやがて一つに重なり、標的である骸骨の左腕を撃ち砕き、吹き飛ばした。

しかし、骸骨の千切れた左腕は先端がまるで泡の様に膨張したかと思えば、すぐさま元の形・大きさの鋭い凶器の生えた大爪へと変貌する。

「……っ!？」

ロボットは残る2体に向けても弾丸を撃ち込むが、結果は先の骸骨と同様だった。いくら吹き飛ばしても端から恐るべきスピードで再生してしまうのだ。

「……っ!！」

ロボットは一度異形から距離を取ると、肩装甲についていたウィングが機体前方に展開、ウィング内から砲身が現れる。

2丁の砲身に一瞬光が集まり、次の瞬間には翡翠の閃光が放たれる。閃光が異形達の中心で炸裂し、爆発を起こす。

「.....」

訪れる静寂。ロボットは警戒するようにゆっくりと爆煙に近づく。

「っ!?!?」

突如、爆煙の中から伸びた触手が、ロボットの四肢を捉える。

視界の先には、バラバラになった状態から、一つに集まろうとする蠢く異形の欠片。

ロボットは触手をふりほどこうともがくが締めつける力はより一層強まっていく。

そうしている間に異形の体は元通りに再生　　否、それどころか先ほどよりも一回り大きく、より歪な形へと変化していた。

ド
ゴ
ッ

異形の巨大な拳が、ロボットの腹部を直撃する。

しかし、四肢の自由を奪われているロボットは、体を曲げることもできずその衝撃と重みを一身に受けることになる。

そこから先は一方的。拳によって何度も撃ちつけられ、鋭利な爪で切り裂かれる。

装甲は既に半壊、頭部のヘルメットは半分に分れ、そこから覗いたのは人の髪のような銀色の繊維の束……。

よく見れば、装甲が剥がれ落ちた腕や脚の部分からは、人肌が見える。

額が割れてしまったのか、既に頭からは血を流し、その銀の髪はみるみる内に血の紅に染まっていく。

骸骨が振り上げた右手が、その胴体を貫く。背面から突き出た鋭い爪は、上から血で塗りつぶされたように紅く染まっている。

肉を引き裂く音と一緒に、爪が抜き取られる。今や抵抗するそぶりは全く見えず、四肢からも力が抜けていた。

触手による拘束が右足を残して解かれると、植物型の異形は思い切り振りかぶり、そのまま真下へと放り投げる。

直下に広がるのは一面の雲。。受け身など全く取れないまま、黒い
ロボットは傷だらけのまま深い雲の海へと沈んでいった

彼女の日常 朝食編（前書き）

自分の脳みその空洞具合をここまで恨めしいと思ったことがあった
だろうか？否、ない。

文才が相変わらずの低クオリティのまま、周りがやってるから自分
もやろうと言う意志の弱さで開始したこの小説。

恐ろしく駄文ですが、生暖かい目で見守ってやってください・・・。
感想やご不満な点、“ここおかしい”といった指摘したい点などは
24時間いつでもお待ちしています。

では、どござい

彼女の日常 朝食編

IS学園

ISに関する規定や制約について定められた条約 通称『アラスカ条約』に基づき、操縦者のみならずメカニックや研究者などISに関する様々な人材育成を主眼とした、特殊な学業機関である。

この学園はあらゆる国家機関から外れており、学園の関係者に対しても一切の干渉が許されないなど、さまざまな条約が設けられている。

「違うの……。私は……」

お姉ちゃん。

「違う……違うの……」

えちゃん。

「……」

ちゃん。

「……………っは!!!!」

意識が徐々に覚醒するのを感じる。それから、滲み出る脂汗と、その汗で濡れ、肌に張り付く衣服の感触も。

「……………随分と夢見が悪いな……………」

少しだけ痛む額を押さえ、そう一人ごちる。

それから私は、ベッド脇に置かれた時計に目を見やった。

「……………今からシャワーを浴びれば、丁度いい頃合いか……………」

そう思うやいなや、私は汗でびしょ濡れになった衣服と下着を手っ取り早く脱ぎ去り、洗濯籠へと放り込んでシャワーへと向かった。

「襟良し、スカート良し、リボン良し、髪良し……」

体を拭き終ってから、制服に袖を通し鏡の前で全体を一つずつチェックしていく。

制服としては珍しい部類に入るだろう、白地に赤と黒のラインが入った制服に、学年別に区別するための赤のリボン。

寝癖が無いことを改めて確認しながら自分の白い髪を括る為に、脇に置いといた黒のリボンを取る。

「……もう2年か……」

さっき見た夢のせいだろう、つい物思いにふけてしまう。

時間なんてあっという間に過ぎてしまう。それこそ、2年なんて月日を昨日の事のように感じてしまうほどだ。

色褪せることのない時間

私にとって大切だったはずの時間は

今はこんなにも私の心を縛りつける

「・・・っと、いかな・・・」

思考の海から意識を引き戻し、時間が迫っているのを確認して玄関へと足を運ぶ。

ドアノブに手をかけた所で、“それ”が視界の中に入る。

映ったのは、額縁に収められた3人家族の写真。

「・・・行ってきます」

少しだけ頬を緩め、私はいつもの様に部屋を後にする。

）

いつもの様に券売機前の列に並び、食券を購入して食堂のおばさんに券を見せる。

ちなみに私が選んだのは鯖味噌定食660円。

ここISS学園は日本だけに留まらず様々な国籍の人間が暮らしている。当然、味の好みや趣味趣向も千差万別と言っていいだろう。

それだけの人間の舌を満足させられる食堂において、この鯖味噌定食の味と値段は大変喜ばしいことだ。

要するに結論としてはだ　　私はここの鯖味噌定食を気に入っていると言っ事だ。

ん？前振り結論に接点が無い？そこは作者の技量のせいだ。察してくれ。

「……まだ頭痛がするな……」

何やら変な周波を感じた気がしたが……こんなことなら頭痛薬を

飲んでおけばよかつただろうか？

ともかく私は、香ばしい味噌の香りがたまらない鯖味噌が乗ったト
レイを持って、適当な席に着く。

ふと、私は食道内の一角を見やる。するとそこには、何やら他の生
徒が群がっていた。

「・・・朝っぱらから騒々しいな」

一体どうしたと言っているのか？

「例の男子入学生ですよ、会長」

突然後ろから声がかかる。

学園内で私の事を“会長”なんて呼ぶのは一人だけ・・・。

「・・・お早う、楯無君」

「お早うございます、愛香会長！」

振り返った先にいたのは、快活そうな雰囲気を纏った、水色の髪の少女。

彼女は可愛らしく敬礼をすると、私と同じく鯖味噌の乗ったトレイを持ち「隣いいですか？」と聞きながら座った。

進級しても人の返事を聞かない所は変わって無いな……。

「楯無君……いい加減私を会長と呼ぶのはやめてくれ。他の生徒が混乱する」

「良いじゃないですか。私にとって会長は会長なんですから」

「意味が解らん……」

軽く溜息をつきつつ、皿の上の鯖味噌を箸で切り分けて口に運ぶ。

うん、うまい。

「男子学生と言うのは確か……」

「そ！あの織斑先生の弟君です」

「織斑教員か……」

織斑教員　　もとい織斑千冬。

ここIS学園の教員にして、過去ISの世界大会である『モンド・グロツソ』において、総合優勝という偉業を成し遂げた人物。

容姿端麗、性格は鬼と呼ばれるほどに自他ともに厳しく、ごく一部の層からは『お姉様』と呼ばれている・・・らしい。本人はウンザリしているみたいだったが。

身体能力、ISに関する知識や操縦技術に長け、またその高潔とも言える雰囲気から、敬意と憧れの念を込めて『ブリュンヒルデ』とも呼ばれている。

閑話休題

で、その織斑教員の弟が、昨日の入学式を期に1年生として入学してきた訳だ。

さて、ここで一つ重要な事を話しておこう。

当初は“宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ”と言ったのがISのコンセプトだった訳だが、ある一人の科学者が引き起こした事件　　後に『白騎士事件』と呼ばれることになる出来事が切っ掛けで、ISの兵器としての価値観が急増してしまう。

ISはコアユニットによって起動する。しかし、全世界でそのコアユニットの開発が行えるのはその科学者一人のみ。

理由は至極単純。その科学者が天才過ぎたのだ。余りにも次元が違い過ぎて、彼女と同等の位置にたどり着ける者など誰一人として存在しなかった。

今までの世界情勢を根こそぎ引つ繰り返す様な事態に、全世界が躍りになってその科学者を搜索するも、彼女は煙の如く行方を暗ませる。

結果、絶対数が467機となったISはそのまま各国の誇示戦力として、互いを牽制する抑止力へと変わっていった。

そついう経緯もあってか、戦力として換算されているにもかかわらず、ISには未だ説明されていない部分が多い。

中でも最も不可思議な点と言えば、ISを操縦するのは女性にしかできない、という点だろう。

そつ。女性にしかにしか、扱う事は出来ないのだ。

織斑一夏 世界で唯一、ISを動かせる男。

ISの存在によって今や女尊男卑が当然となった世界に、彼は唐突に吊し上げられることとなった。

「酷い話だ……あれでは客寄せパンダも同然ではないか」

「まあ、仕方ないと言えば仕方ないですけどね。織斑先生も苦渋の決断だったんじゃないですかね？放っておけば、最悪実験動物扱いですよ？」

「ここにいる時点で、モルモット実験動物であることは変わらんだろう……」

「相変わらずきつついなあ……（汗）」

楯無君はきついついと言うが事実であることには変わらない。

実際技術畑の人間から見れば、彼の存在はISの大きな謎を解き明かす重要なカギとなる。

そうでなくとも、ある意味では世界でたった一人の異性とも言えるのだ。

その異性を、基本女性しかいないこのIS学園に入学させると言う事は、空腹の肉食動物の前に餌をぶら下げると同義だ。

いくら女尊男卑の風潮とは言え、彼女達とてまだ思春期の女の子なのだから。そ……う……いう……考えを持つ女子が居るのは当然と言える。

「なんだか会長は、全然興味が無さそうなんですわね・・・」

「まったく無いと言えば嘘になるが・・・彼女達ほどではないさ。そういう君はどうなんだ？その口ぶりでは興味津々に聞こえるが・・・」

「まあ、ぶつちやけ私も会長とさほど変わんないんですけどね・・・そう言えば会長知ってます？」

「ん？何がだ？」

のんびりと食事をしながら会話が続く。正直私を会長と呼ぶのは割と本気でやめてほしいのだが・・・それを言及した所で楯無君は一切やめないだろうし、追求するのは不毛と言うものだ。

完全にスルーすることを決めた私は、味噌汁の椀を持ちながら、楯無君の疑問に疑問を持って返した。

「その弟君、来週月曜日に、クラス代表を掛けて決闘するそうですよ？しかも相手は専用機持ち」

「今年の1年で専用機持ちと言うと、相手はミス・オルコットか・・・？」

それはまた、彼も随分と思いきった事をするものだな。

セシリア・オルコット　確か1年生のイギリス代表候補生で、
新入生の中では唯一の専用機持ち。

イギリスの名門貴族のお嬢様で、大の男嫌い（だったはず……）。

彼女の駆る『ブルー・ティアーズ』は、未だ研究段階にある『BT
兵器』のサンプリングのための機体としての意味合いが強いが、そ
れでも、使いこなせば十二分な実力を誇る射撃戦主体のISだ。

「会長はどう思います？」

「最初から結果が見えてるようなものだろう……彼に勝ち目はあ
るまい。楯無君は？」

「私ですか？……ふふっ」

私が聞き返すと、楯無君は意味ありげに微笑む。

「まさか……勝つと言うのか？彼が」

「そのまさかですよ。絶対ってわけじゃないですけど……だって、
世の中なんて何が起こるか解らないじゃないですか？」

……

「……………」

「ああーっ！…！なんですかその顔！？会長今私の事バカだと思っ
たでしょー！…」

っといかん。どうやら呆れていたのが顔に出てしまっていたようだ。

「別にそういう訳では「本当ですかぁ…？」「っ…………ただまぁ、
何だ…………君の言う事にも一理あると思っとな」

「嘘臭いなぁ……………」

「むう……………」

不味いな…………楯無君はジト目でこちらを睨んでいる。

彼女を敵に回すとロクな事が無いんだが…………。

「いつまで食べている…！食事は迅速に効率よく取れ…！遅刻した
らグラウンド十週させるぞ…！」

その怒声が食堂内に響いたのは、私が必死に楯無君への弁解を考えているときだった。

追記。

織斑千冬は、この学生寮の寮長でもある。

彼女の日常 放課後〜崩壊編（前書き）

人まずここまでを掲載。

ここから先はどうしようかな・・・（オイ

彼女の日常 放課後〜崩壊編

「 なおす」

「 「はい？」」

「 鍛え直す！！IS以前の問題だ！！これから毎日放課後三時間！
！私が稽古をつけてやる！！」

「 んなっ!?!?」

「」

.....。

はて？どろじてろろろっているのか.....。

〈冒頭より三十分前〉

「ふむ……誰もいない……か」

放課後、珍しく楯無君に捕まる事も無かった私は、久しぶりに剣道場を訪れた訳だが……。

相変わらず、竹刀がぶつかり合う音など響きもしない場所だな。

「まあ、前の3年生が引退してしまったから、当然と言えば当然か……」

元々3年生以外の部員も少なかったうちの剣道部は、先輩達が引退してからその数が激減した。

幽霊部員が何人かいる程度で、部長になった私でも、ここ最近の出席率から考えると、他の部員達と大差がないように思える。

「失礼します」

「ん……？」

後方から声。

振り向いた先にいたのは一人の女生徒だった。

黒の長髪をポニーテールで結った彼女は、私と視線が合つと、眉根を少しだけ寄せて、こちらを怪訝そうに見た。

「・・・あなたは・・・？」

「私は一応部長なんだが・・・新入部員、と言う訳ではなさそうだな」

ひとまず、彼女の近くへと行くべく、入口へと足を運ぶ。

「私は御白愛香。キミは？」

「篠ノ之・・・篠ノ之箒です」

「篠ノ之君か・・・それで？要件は一体何なんだ？」

「実は・・・」

「へえ・・・剣道場とか、何か懐かしいな」

話し込んでいた際に聞こえる、女性のそれとは違う低い声。

声が出た方を見やれば、そこに立っていたのは、着ている制服も背丈も体格も、違う存在。

「君は……？」

「遅いぞ、一夏」

「悪い悪い。何か久々でさ……」

「一夏？と言う事は……」。

「なるほど……君が織斑教員の弟か」

「筈……この人は？」

「剣道部の部長だそうだ」

「御白愛香だ。よろしくな、織斑君」

私は織斑君に右手を差し出す。

「あ……どうも」

織斑君は恐々としながらも、私の右手をしっかりと握り返す。

「あゝコホンっ!!・・・部長、少し道場を使わせてもらいたいですが・・・」

「ん? ああ・・・別に構わんが・・・」

道場を使うと言う事は、試合でもするのか?

「織斑君、キミは剣道の経験が?」

「あ、いや、俺は・・・」

「一夏! 何をしている!! さっさと準備しろ!!」

)

「回想終了・・・と」

で、今に至った訳だが・・・。

結論から言えば、結果は凄惨たるものだった。

織斑君は剣道の経験はあるにすぎないのだが、それは幼少の頃の話らしく、学園に入学するまでの3年間はずっと帰宅部だったらしい（本人曰く3年間皆勤賞だったとか）。

構えはそれなりだったが中身はカラッキシ。上段に構えれば速攻で胴を取られ、薙げば面に一撃を喰らい、突けばあっさりと捌かれて籠手を払われる。

ある意味ここまで綺麗に決まるのを見たのは久しぶりかもしれない。

（そう言えば篠ノ之君は優勝経験者だったか・・・）

去年の新聞のスポーツ面に“全国大会優勝”と名前が出ていたはずだ。

そう思うと、篠ノ之君の実力が本物であるのも頷ける。

構えた時の彼女は実に綺麗で、纏う雰囲気はまるで抜き身の刀剣の様な鋭さを持っていた。

・・・もつとも、今は織斑君の不甲斐なさに大分頭にきているようだが。

「とにかく！明日から特訓だ！いいな！！」

憤りが冷めやらないまま、篠ノ之君は吐き捨てるようにそう言って、更衣室へと入って行った。

「……つたく、何なんだよ……」

「お疲れの様だな、織斑君」

「あ……なんか、すいません。あいつ、勝手にここ使うみたいに言ってる……」

「いや、別に構わんよ。どうせ使う人間はほとんどいないからね」

「愛されてるのだな、キミは」

「はっ」

私の発言に、織斑君は「何言いだすんだこの人？」みたいな顔をす
る。

「だってそうだろう？普通どうでもいい奴ならば、毎日付き合っ
たと言い出したりはしないさ。彼女は君が大切なんだな……」

「いや……そうですかね？俺にはただ一方的にド突かれてたよう

にしか感じませんが……」

「いまいち得心がいけないと言った風に、織斑君は頭をクシャクシャと掻く。」

「……ここでの生活はどうだ？うまくやっていけそうか？」

「どうだろ……ぶつちやけ周りは俺以外みんな女子だから、正直苦勞しか感じないけど……」

「ふふっ……だろうな……キミは、ISを手に入れて、この世界でどう変わっていく？」

「あの……先輩？」

織斑君は、ますます意味が解らないと言った具合の様だ。

ふむ　　私は何が言いたいのだろう？

「キミが力を手に入れたのが、たとえ偶然でも、たとえ誰かの差し金だとしてもだ。キミが力を手に入れたのは事実だ」

「……」

「いつかそれは、キミの中でも重要な意味を持つはずだ。だから、今はどうか、その力の矛先を、違えることだけはしないで欲しい」

清とした、静寂な空気が場を満たす。

ただ、彼は目を逸らすことなく、真剣にこちらを向いて聞いていた。

「……すまない。偉そうなことを言った」

「あ、いえ……」

「私はもう帰るが、君はこれからどうするんだ？」

「……もう少しだけ、残って続けます」

「ん……解った。鍵はしっかりと掛けてくれよ？掛けたら職員室に返してくれればいい」

「はい」

「それから、道場の使用についてだが、私が部顧問に話をしておこう。なに……そう手こずる事も無いだろう」

「あ！すいません……」

「構わんさ・・・それじゃあ、私は失礼するよ?」

玄關脇に置いていたバッグを手に掛け、道場を出ようと入口に向かう。

「あの!御白先輩!!」

「ん?」

ふと、織斑君に呼び止められる。

「ありがとうございます!」

突然、姿勢を正してきつちりと頭を下げた彼に、私は少しだけ面喰ってしまった。

「・・・頑張れよ、青年」

少しだけ頬を緩め、私は道場を後にする。

「何を偉そうに語っているのだろうな・・・私は」

~~~~~

1週間後

「・・・なかなか始まらない」

遮断シールドで隔たれた競技場内を見て、そう呟く。

今私がいるのは、学園敷地内にある第3アリーナの観客席。

右も左も見渡す限り人、人、人。今日の日程は学年別のクラス対抗戦なのだが、どちらかと言えば、大半の生徒にとってのメインは、今から始まる特別試合だろう。

カードは、一年一組、織斑一夏。そして、同じく一年一組、セシリア・オルコット。

クラス代表決定戦と銘打たれたこの試合は、生徒の、否、この学園に関わる全ての人間の興味を引くに足るものと言っていていいだろう。

ある者は、好奇心から。

ある者は、今後の研究のため。

ある者は、自国に情報を持ち帰るため。

これほどの人混みの中に、どれほどの思惑が交錯しているのかと、考えるだけで気が滅入りそうになる。

「機体の到着が遅れてるそうですよ？」

このタイミングにこの快活そうな声・・・またいつものパターンか。

「・・・生徒会はいいのか？楯無君」

「大丈夫ですよ 今は虚うつはに任せてますし」

「大変だな、彼女も・・・(汗)」

楯無君はさも当然の様にそう言って、私の隣に腰を下ろす。

布仏君の心中を察するな・・・。

「ところで、機体が遅れてると言うのは・・・？」

「あゝ、それがですね？何でも弟君が使うのは、訓練機じゃなくて学園側が用意した専用機を使うらしいんですよ」

「専用機だと？国からの援助があったと言う事か・・・？しかし、君は一体どこからそういう情報を仕入れてくるんだ・・・？」

「これでも私も17代目ですからね。このくらい訳ないですよ」

そう言つて楯無君は腰に手を当てて自慢げに胸を張る。

と言つか、それを一般人の私に言つて彼女は大丈夫なのか？

「……まあ、こんな飄々とした態度でも、楯無君はしっかりとした子だから、大丈夫だと思うが。」

「ともかくこれで、条件的にはイーブンですよ。まあその専用機の性能にもよると思つけど。」

「……」

「……会長？」

「ん？ああ……」

「どうしたんですか？何か、気になる事でも？」

曖昧な返事を返す私の顔を、楯無君は覗き込んだ。

「……多分、彼の技量は1週間前と同じだ」

「はい？」



1週間前、私は部顧問の了解を得られたことを、織斑君と篠ノ之君に伝えた訳だが……。

それから今日まで毎日、夜頃まで剣道場の明かりがついていたのを私は見かけた。

その後、まさかと思ってアリーナと訓練機の使用履歴を調べてみた<sup>ログ</sup>ら、案の定だった。

ISもアリーナも、一切使用されていなかったのだ。

つまり、織斑君と篠ノ之君は、この1週間、剣道の特訓“だけ”していたことになる。

事の真相を楯無君に伝えると、楯無君は口端を吊り上げて引きつった笑いを浮かべていた。

）

「背中を預けるように・・・そうだ、それでいい。あとは“白式”が自動で合わせてくれる」

千冬姉の言う通りに、目の前の白いIS　　白式に体を預ける。

少しだけ奇妙な感じがして、しかしそれもすぐに消える。

それから、空気を抜くような音と一緒に、俺の体が白い装甲に覆われていく。

そして、自分の体と白式が、融合し一つになっていく。まるで生まれた時からそうだったように、白式の手足が俺の感覚と繋がっていく。

ハイパーセンサーによって、視界は一気にクリアになり、自分を中心に世界が広がったように感じる。

戦闘待機状態のISを感知。　　個体名称　ブルー・ティアーズ

眼前に映し出される情報は、最初から見知った物の様に理解が出来る。

「ハイパーセンサーに問題は無い様だな。一夏、気分はどうだ？」  
僅かに震えて聞こえる千冬姉の声。センサーが無かったら絶対に気づけないほどの感情の機微。

「大丈夫だよ、千冬姉。行ける」

「そうか」

ホッとしたような千冬姉の言葉。これも、多分センサーが無ければ気づくことは難しいと思う。

ふと、後ろいる箒に意識を向ける。360度全方位が『見える』今なら、わざわざ後ろを振り向く必要はない。

「……」

箒の表情は、一見すれば普段と変わらないように見える。でも、どこか言葉に迷っている様にも見えた。

「箒」

「な、何だ・・・？」

「行ってくる」

「!・・・ああ、勝って来い!!」

そのまま振り返る事無く、片手を上げて応え、俺はゲートへと歩を進めた。

いつか“それ”は、キミの中でも重要な意味を持つはずだ

「力の意味・・・か」

一週間前に出会った、不思議な雰囲気を持った先輩の言葉。

だから、今はどうか

「まあ、負けたらこの1週間付き合ってくれた筈にも申し訳ないしな……」

腹は括った。今更、後ろを向いて逃げだすなんて弱腰は、微塵も湧いてこない。

「さて……行こうぜ、相棒白式!!」

今、戦場大空へと飛び立つ。

)

あれから暫らく置いて、織斑君がISを着て、ミス・オルコットと対峙する。

織斑君のISは、両腰と両肩、それから四肢を覆う純白の装甲に、両肩に浮遊する1対のスラスターと、訓練機並みに簡素な装備。

対するオルコットは、その名の通り青の色彩で彩られた装甲に、右手には大型の狙撃用スコープライフル。何より特徴的なのは、その背に従えた、同じく青色を宿す4機のフィンアーマー。

アリーナ内に張りつめていく緊張。空中の二人は何か話しているのだろうか？まだ動きは見られない。

少しして、オルコットがライフルを撃ち放ち、織斑君の左肩を撃ち抜く。

戦いの火蓋が、今まさに切って落とされる。

オルコットのライフルが、その銃口を彼に定め、連続で火を噴く！！  
続けざまに穿たれる閃光。それを織斑君は右へ左へと回避しながら、  
オルコットへと近づくべく上昇していく。

しかし、彼の回避する様はどこか危うげで、“避けきれていない”  
と言うよりは“振り回されている”と言う印象が強かった。

「もしかして、まだ一次移行が終わって無いんじゃない……」  
ファースト・シフト

隣にいる楯無君がそう呟く。

ISは、自己進化を設定されたプログラムでもある。

さまざまな戦況による戦闘経験、ダメージ比率や思考パターンによる搭乗者の特性や長所など、あらゆるものを学習して、自らの形状や性質さえも変化させていく。

「となると、勝負の要は一次移行……」

「それまでに彼が耐えきれるか、ですね……」

視線をアリーナへと戻す。

オルコットのフィン・アーマーから、4機のビットが切り離される。

四方八方から襲い来るレーザーの嵐に、織斑君の装甲は徐々に削られていく。

知らぬうちに、握り拳を作ってしまう。

だが、劣勢でありながらも、彼を見てこの状況に絶望している様にはとても思えなかった。

彼はこの状況を覆す。

そんな気がしてたまらない。

そして、それは確信へと変わる。

突如、織斑君の動きが良くなる。

大きく距離を取りながら、放たれるライフルの一撃を回避し、避けきれないものは右手のブレードで上手く弾いている。

「動きが変わった!？」

「扱い方を飲み込み始めたか・・・」



最初よりもよりスムーズに飛び、レーザーを避けていく様は、まるで円舞曲ワルツを見ているような気分になる。

再び、オルコットのフィン・アーマーから、4機のビットが飛び立つ。

しかし、織斑君は猛攻をかいくぐり、ビットの一つに斬撃を見舞う。残りのビットが織斑君を撃ち落とさんと猛威をふるうが、彼はそれを待ち伏せてたかの様に回避、さらにビットをも一つ一つ両断する。

「どうやら気付いた様だな・・・」

ブルー・ティアーズ最大の特徴にして長所、『ビット兵器』は、しかし同時にこのISの弱点にもなりうる。

遠隔誘導兵器の制御に必要なのは、三次元の空間把握能力と、何よりも多大な集中力！

しかも、それを4機同時となれば意識のほとんどをビットの操作に向けなければならない。故に、オルコットはビットの操作中は他の兵装を使う事が出来ず、必然的に無防備になる。

さらには、遠隔誘導と言ってもそこにはどうあっても人の思考が入

つてくる。人間が扱う以上『完全』に使いこなすのはまず不可能。戦闘が長引けばパターンを読まれるし、操縦者が動揺すれば機動性も落ちる。

オルコットが操るビットにも、スピードの遅れがみられる。恐らく動揺しているのだろう、ライフルの狙いも徐々にぶれ始めていた。

対する織斑君は、逆に冷静なようで、飛んでくる閃光を確実に回避している。もしかしたら、篠ノ之君との剣道の特訓は思った以上に功を奏したのかもしれない。

勢いに乗った織斑君は続けざまに3機目のビットも叩き斬り、さらに4機目を蹴りとばして破壊する。

そのまま織斑君は一気に間合いを詰めようと、オルコットに向かって一直線に加速する。

しかし、その瞬間、オルコットの腰部にあるスカートアーマーの筒状のパーツが、装甲から分離する。

「まさか、弾道型<sup>ミサイル</sup>!？」

回避は間に合わない。彼の姿は成す術も無く光と爆炎に飲み込まれる。

静まり返るアリーナ。今ここにいる全ての人間の視線が、煙の中の彼へと注がれる。

爆炎の中から姿を現したのは、純白の翼を纏った白い騎士。

ギリギリで間に合ったのだろう。一次移行を終えた彼の機体は、最初の凹凸の多かった無骨なものとは違い、流線形を主とした滑らかな装甲へと変わっていた。

両肩に従えたスラスタもまた、一回り巨大なものへと変わり、まるで一对の翼の様に変化していた。

そして極めつけは、彼の右手に握られた、一振りの刀。

「あの刀は……！」

「会長……あれが何なのか解るんですか？」

「ああ……見間違えるはずもない……」

私の記憶が正しければ、あの刀は、かつての戦乙女が、その頂に立  
つていたときに手にしていた得物。

「ふふつ……本当に彼は、いろんな者から愛されているのだな……」

つい、そう呟いてしまう。

ある意味では、あの一振り程、彼にとって心強い武器は無いだろう。

彼の右手に握られた刀が、エネルギーの刃を纏う。

恐らく危険を感じ取ったのだろう、オルコットは距離を取り、弾頭  
が再装填されたミサイルの照準を、織斑君に合わせ撃ち放つ。

織斑君は先程までとは段違いの速度で飛翔する。その姿はさながら白い流星の様だ。

一瞬の内に、迫り来るミサイルに接敵、すれ違いざまに2機とも両断する。

そのまま一気にオルコットの懐まで飛び込み、刀が下段から逆袈裟に振り払われ

)

プシッ

プルタブを持ち上げると同時に、聞こえてくる空気の抜ける音。

飲み口から立ち上る湯気。息を吹きかけながら冷まし、適温になった熱い液体を口内に流し込む。

「…………ふう…………」

一息つき、なんとなく空を見上げれば、頭上に広がるのは満天の星空。そして、淡い光を落とす満月。

今の私は、青のパジャマに、灰色のストールを羽織るといって格好だった。

しかし、思いのほか肌寒くて、廊下の自販機で缶コーヒーを買って飲んでいた。

消灯時刻などとつくに過ぎた3年生寮の屋上。なんとなく寝付けなかった私は、部屋からこっそりと抜け出して、気付けばここに足を運んでいた。

「1年生寮は、まだ少し騒がしいな・・・」

あのクラス代表決定戦から、今日で一日たった。

「まあ、結果は負けだったかな・・・」

そう。あの試合、結果的には織斑君の敗北として終わった。

最後の一撃を叩きこむ直前で、織斑君のISSのエネルギー残量が底を尽きてしまったのだ。

ただ、結局クラス代表は織斑君に決まったそうさ。何でも、オルコットが自ら代表を辞退したらしい。

あれほどの熱戦を演じたこともあって、織斑君は学園内での知名度を一気に上げることになった。

楯無君なんかは、これから面白くなりそうさ、と嬉々として語っていたが。

「大変だな・・・彼も」

なんとなく、片手を空に向かって掲げてみる。手の隙間から見える星々の輝きが、妙に眩しく感じてしまう。

理由は、なんとなくわかる。

きっと私は、彼らを羨ましいと思ったんだろう。

あの時、踊る様に大空を舞っていた、彼らの事が。

「・・・馬鹿だな・・・私は」

そんなこと、許される筈もない。



だって、私は

「……………ん？」

意識が視線の先の星の天幕へと戻る。見れば、一つだけ妙に輝きの強い星があった。

「流れ星……………ではないよな……………」

その星は徐々に光を増していき　　と言っか、どんどんその大きさを増して……………

「……………まさか……………」

ふと、頭の中に浮かぶ一つの単語。



夜中だと言う事をすっかり忘れた私の叫び声と、爆発のような重厚な衝撃音が、屋上に木霊した。

「くっ……」

衝撃で倒れこんでしまったのだろう、今の私の態勢は、屋上に仰向けになっている。

特に体に異常を感じる部分はない。どうやら全身を打ちつける程度ですんだらしい。まあ、それはそれで痛いものは痛い。

と言つか、さっきから妙に体が重い。

「一体何が……っ!？」

一瞬、息が止まる。

視界に飛び込んできたのは、整った顔立ちに銀の髪。眼は閉じられているから、多分気絶しているか何かなのだろう。

私の体の上に、人一人が覆いかぶさっている様な状況。

そして、胸のあたりに、何やら温かな感触。見れば、その人の少し細めの腕が、私の胸を掴んでいた。

「ひ……」

口端が引き攣るのを感じる。

頭の中が真っ白になるのを感じる。

顔に熱が集中するのを感じる。

頭に血が昇って行くのを感じる。



「嘘……」

月明かりのおかげで、手元は良く見えた。

私の手に有ったのは、普段道理の肌の色ではなく、真っ赤な、どこまでも真っ赤な深紅。

血だ。

よく見れば、私に来ていたパジャマにも、べったりと血が付いていた。

「っ!!」

慌てて、先程突き飛ばした彼に駆け寄る。

やはり、月明かりのおかげでよく見える。その光で照らされた彼の体は、血だらけだった。良く見れば、綺麗な銀色の髪も、半分近くが血に染まっている。

「!!おい、しっかりしろ!!キミ!!おい!!!!」

呼び掛けても、返事は無い。以前、目を閉じたままだ。

これが、後に私にとって重要な事への引き金になる等。

一体、どうやって理解できると言っただろっ？





## 始まりを告げる

「ふうん……空から落ちてきた……ねえ？」

「……」

目の前で、白衣を着た女性が、回転式のイスに座りながら、悩ましげに腕を組んで唸る。

そんな彼女に、私は黙ったまま、同じように椅子に座って、向かい合っていた。

人が空から落ちてきた。

普通に考えれば信じられる訳が……

「解ったわ。信じましょう」

「って、あれ!？」

「う、卯月教員……?」

「ん?なあに?」

「いや、信じるんですか……？」

「だって、嘘じゃないんでしょ？」

彼女 卯月教員は、逆に私が聞いてきたのを不思議がるように、首を傾げた。

。 と言っか、こつもあつさりと信じてくれるとは思わなかったが……

「大丈夫 愛香ちゃんが嘘をつくような子じゃないって、先生知ってるから」

「……ありがとうございます」

「良いの良いの それよりも愛香ちゃん、もう1時頃だし、そろそろ寮に戻りなさい」

「で、ですが……」

「先生の事だったら大丈夫よ それともなあに？何か彼の側に居たい理由でもあるの？」

ふと、今は保健室のベッドで寝ている彼を見る。

頭に浮かぶのは、屋上での出来事。彼の顔が目と鼻の先まで迫り、  
彼の手が

「っ！！！！／／／／／／／／／／」

ななな、何を考えてるんだ私は！？彼は気絶していたんであって、  
別に意識してそういう事をした訳じゃ！と言うか別に知り合った相  
手ですらないのに何を变に意識しているんだ私はあああああああ  
ああ！？！？

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

「だ、大丈夫？愛香ちゃん」

「っ！？だ、大丈夫です！！別に变なことなんて・・・！！」

「変なこと・・・？」

「っ！！！！／／／／／し、失礼します！！！！」

寝よう！もう今日はさっさと寝てしまおう！！卯月教員は大丈夫だ  
と言ってるんだから大丈夫だ！！と言うかこれ以上は色々と耐えら  
れん！！！！

顔面が火だるまになったように感じながら、私は脱兎の如くその場

を後にした……。

）

「行っちゃった……」

何があったのかは知らないけど、愛香ちゃんは顔を真っ赤にして走り去ってしまった。

ああいうのを『顔に火がつく』って言うんでしょうねえ……。

まさかこんな夜中に、生徒が保健室に尋ねてくるなんて、露ほども思わなかった。

丁度論文を纏めていた所だったから、ここに来るのが無駄足だったと言う事にはならなかったみたいだけど。

私が居なかつたら一体どうするつもりだったのかしらあの子？……  
・いや、そんなこと、今考えた所で意味は無いわね。

「それにしても……」

あの子がいきなり血だらけの人間を連れてきたことにはさすがに驚いた。

が、改めて考えてみると、不可解な点が多過ぎる。

ここに連れてこられた彼の体には、血塗れになるほどの大きな傷跡は一切無かった

ならなぜ、彼は血に塗れていたのか？

愛香ちゃんの証言を信じるなら、彼は空から落ちてきたらしい。

血塗れの状態で落ちてくるような何か、このIS学園の上空で起きていた？

「まさか……」

不意に、頭の中に一つの仮説が浮かぶ。

否 仮説と呼ぶにはあまりにもお粗末な誇大妄想に等しい。

「でも・・・もしそれが本当だとしたら」

あり得ない。

そう思っている筈なのに、妙に心がざわつく。

まるで、その考えが当たっている様な

「・・・今は考えても仕方ないか・・・千冬ちゃんにでも相談しようかしら?」

もっとも、千冬ちゃんはバカげた空想だと一蹴しそうだけれど。

とりあえず事の真相は、この眠れる王子様が起きるまでは闇の中ね・・・。



目覚める

・・・？

刻トキが近づいている

・・・ウキッ？

役目を果たせ

役目？役目とは何だ？

使命を果たせ。お前はそのため



「……んっ……」

IS学園から、そう遠くない、とある街の路地裏。

その一角で、一人の青年が目を覚ました。

「……ここは……？」

青年は立ち上がって衣服を軽く払い、辺りを見回す。昼間だと言うのに薄暗く、少しだけ不気味な空気が漂う。

「……とりあえずここから出た方がいいか」

そう一人ごちると、青年は壁伝いに歩き出した。

しばらくして、人通りの多い場所へと出る。

青年はキョロキョロとまた辺りを見回した後、宛ても無く歩き始めた。

そんな彼を、道行く人々は少しだけ奇異の目で見ていた。

この近辺は女性が多く、今の世の中の風潮からか、男性が居ることが珍しいだけかもしれない。別に彼が露出狂だとか奇抜な服装をしている訳ではない。

青年の服装は、上は今時珍しい無地の黒Tシャツ、下は灰色のジーンズ。髪は銀色で、首の辺りでその長い髪を束ねていた。男ではなかなか見かけない様な、黒革に金のプレートが付いたチヨーカー。そして一際目立つのが、ジーンズに通された黒のベルトを、ホルスター代わりにして腰に差し込まれている自動式の拳銃。

当然、拳銃など普通の人間は持ち歩かないし、下手に関わらない方がいいと判断するのは普通だろう。

だがそれ以上に、青年からは近寄りがたい何かを感じた。

ハッキリとした光の無い、どこか虚ろにも見えるその翡翠の瞳のよ

うに、彼からは“何か”が欠けているように見えた。

そんな彼が、そのまま亡霊のように歩き続けていると、ある場所が視界に入る。

「え〜っと・・・違う・・・ここは・・・さっき通ったか？・・・あ  
あっもう！！わけわかんないし！！」

見れば、人混みから少し離れた所で一人の少女が、大きめの用紙を持って苛立たしげに声を荒上げていた。

少女もまた、少しだけ周りの人から距離を取られていた。そりゃ往  
来の激しい町のだ真ん中で大声を出せば引かれもするだろう。

が、青年はその少女を見ると、体の向きを変えて真っ直ぐその少女  
へと歩み始める。そして、少女の目の前で立ち止まると、少し覗き  
込む様な形でこう尋ねた。

「……どうかしたのか？」

突然声をかけられた少女は、睨みつけていた紙から目を離して顔を上げると、青年と目があった。ちなみに、青年が覗き込むように見ていたため、結構近かったりする。と言うか、ほぼ目の前だった。

「うわっ！？な、何よアンタ！？」

「いや……何やら叫んでいたから声をかけたのだが」

いきなり声をかけてきた青年に、少女は警戒と憤慨の入り混じった目を向ける。しかし青年は、とくになんとも思っていないのか。無感情のままに少女の疑問に答えた。

「ふんっ……別に、あんたには関係ないでしょ？」

「そうか？ならいいのだが」

「ってちよつと！？」

素っ気ない態度で少女は青年を拒絶する。それを受け、青年はあっさりとして少女に背を向けた。

ただ、余りにもあっさりとし過ぎていて、逆に少女が待ったをかけ

る。

「いくらなんでもあっさり退き過ぎでしょー!!」

「?何かおかしいのか?」

「普通はもう少し粘ったりするでしょうが!!」

「……結局俺はどうすればいい?」

「え?いや、私に返されても……ああっ、もう!!」

逆に聞き返されたりと、どうにもややこしい状況に、少女は苛立ち、その勢いそのまま持っていた用紙を青年に突き出す。

「あんだ、この地図読める?」

突きだされた用紙を手に取り、書かれている図面を、周りを見回しながら照らし合わせる。

「……多分、さっき通った所だ」

「ホント!?じゃあそこまで案内して!!」

「解った」

コロコロと表情を変える少女とは対照的に、青年は無表情のまま、やはりあっさりと返事をし、踵を返して歩き始めた。

）

私がわざわざこっちにやってきたのは、元を正せばあいつの為  
否、あいつのせいだと言える。

あいつとの付き合いは小学校の5年生から。引っ越した当初、まだ  
周りの環境に馴染めてなかった私に、最初に声を掛けてくれた奴だ  
った。

それから色々あって、そいつの友人を含めて3人で、よく遊ぶようになった。

中学2年の終わりごろになって、生まれ故郷に帰る事になった。

理由は、家庭の事情。

それから丸1年がたって、あいつがテレビに映っていたのを見たときは、それは驚いたものだ。だが同時に、歓喜が心内に湧き上がったのも事実だ。

最初は興味など全くなかった学園にも、九割方無理を押し通して転入の手続きを済ませてもらった。

何よりもう一度あいつに会えると言つのが、楽しみで仕方がなかった。

幼き日に約束した事を、果たすこともできるだろう。もっとも、あの末期症状のごとき鈍感さを併せ持っているあいつが、約束をちゃんと覚えているのかと言つ若干の不安もあるが。

そんな気持ちの高揚も相まって、予定より早く、日本に帰ってこれた。一応は、入学することになる学園の下見だと言っておいた。でも、もしかしたら偶然あいつに会えるかもしれない。そんな密かな期待もあった。

が、迷った。それも速攻で。

丸1年のブランクは予想を遙かに上回り、最早土地勘の“と”の字すら残っていなかった。

侮っていたと言うか、浮かれていたと言うか。

最早あいつに会うどころではなくなってしまった。それどころか、最悪野宿なんてことになりかねない。それだけは死んでも嫌だ。

そんな折だった。いきなり声を掛けられたのは。

イライラしていた所に、いきなり声を掛けられて、私は睨んでいた。地図から視線を外す。顔を上げると、そいつは私を覗き込むように覗き込んで、いきなり視界に飛び込んだ顔に、私は飛び退いた。

目の前に立っていたのは、銀髪の髪の、整った顔立ちをした男だった。

服装は上が黒に下は灰色と言う、彩の無い服装。あと目を引くのは、



首に付けた黒いチョーカーと、腰のベルトに差し込まれた拳銃。

拳銃なんて物騒なものを持っているだけでも十二分に怪しい。でもそれ以上に気になるのは、こいつの表情だ。

乏しいなんてもんじゃない。まるで能面か人形のように感情が無い。

翡翠みたいな淡い色の瞳からは、暗く深い井戸の様な、底知れない“何か”を感じた。

懐疑と拒絶の念を込めて構うなど言い放つ。

が、この男の反応は私の予想の斜め上どころか真反対だった。

あっさり退いたのだ。それはもうあっさりと。思わずマンガみたいなこけ方をしてしまった。

いや、だって・・・こんなあっさり退くだなんて・・・変に警戒した私がバカみたいじゃない!!

しかも、そのまま文句を言ってやったら、逆に聞き返されてしまっ

た。

何だか対応に困るなあ……こういう奴を相手にしたことってないからどうしたらいいのかわからない。

もうヤケクソ気味に持ってた地図を押しつけてみると、都合の良いことに道順を知ってるらしい。この際だから案内してもらおうことになった。

「あつ……私、フマリン鳳鈴音。あんたは？」

「ん？」

「名前よ名前……こっちが名乗ったんだから、あんたも教えなさいよ」

「ふむ……名前か……」

「何？まさかわからないとか言い出すんじゃないでしょうね？」

「いや……俺の……名前は……」

「……ホントに、解らないの？」

私の問い掛けに、こいつはゆっくりと首を縦に振った。これはいわゆる、記憶喪失という奴だろうか？

「何かないわけ？名刺とか、身分証明とか」

「と言われてもな・・・ん？」

ジーンズのポケットをまさぐっていたら、何かあったらしい。

取り出したのは、ホルダーチェーンの付いたスチールのプレートでできたタグ。

「ネームプレートかな？・・・ちょっと見せて」

私はタグを受け取ると、それをまじまじと見つめる。良く見れば、少し掠れてはいるけど文字が書いてある。

「・・・a・・・s・・・h・・・?どっいつ意味・・・?」

「アッシュ」

突然、こいつはそう口走った。最初から知ってたみたいに、ハツキリと。

「！解るの!?!」

「いや……これを見ていたら、急に頭に浮かんだ」

「ふうん……まあ、今考えてもしょうがないわね。それじゃ、改めて案内よろしくアッシュ」

「……俺の事か？」

「ちょうど良いじゃない？何も無いよりはましでしょ」

「……解った」

とりあえず呼び名が決まった所でまた歩き始める。

「ねえ？あんた、ホントに何も覚えてないの？」

「ああ……気がついたら、ここの路地裏に倒れていた」

なんとも奇妙な話だ。

アッシュが言うには、誰かに呼ばれた様な気がしたらしい。それで、目が覚めてみれば、周りは見知らぬ場所。どころか、自分が何者かさえ、解らない。

一体どういう感覚なのかは分からない。当然だ。記憶喪失なんて体験したことは無いのだから。

苦しいのか？

或いは、怖いのか？

それとも、寂しいのか？

考えた所で答えが出る訳でもない。

アッシュに聞いてみても、相変わらずの無表情で、「解らない」とか、「さあ？」としか言わない。……こいつは事の重大さを理解してるのだろうか？あまりにも味気ない返事に、少し真剣に考えてた自分がバカらしくなってきた。

それからしばらく歩いて、目的の場所が見えた所で、私たちは別れた

)

深い深い暗闇の中。

混ざり合い、境界線を持たない世界。

広がる全てが自分で、その一つとして自分だという確たる認識は無い。

ふと、呼ばれた様な気がして。

徐々にハッキリとしていく感覚を頼りに、重々しい瞼を持ち上げる。

最初に目に入ったのは、壁の合間から覗く青空。それから、周りに漂う薄暗い気配。

頭の中に残響のように残る感覚を頼りに、宛てもなく歩きだす。

しばらくして、人の気配が増え始める。どうやら、湿った空気はここで終わりらしい。

人の流れに紛れるように歩く。ふと、一人の人間が視界に映る。そいつは何やら紙と睨み合いながら、ブツブツと呟いていた。

周りの人間はそいつに視線をくれても、話しかけようとはしなかった。

何をしているのか気になり、話しかけてみたが、何でもないらしい。何でもないなら仕方がない。そう思い背を向けたのだが、急にそいつに引き止められた。

何か気に入らなかつたようで、どうすればいいのか聞いてみれば、急に唸りだしたかと思うといきなり怒鳴り、持っていた紙を押しつけてきた。

紙には、いくつかの建物の名前と、道が書かれている。建物の内の一つに丸印があつた。

この丸印の所に行きたいが、道順が解らないらしい。

紙に書かれていた建物が、途中見てきたものであることを伝えると、そいつはそこに案内して欲しいと頼んできた。

了承し、来た道を引き返す。

突然、そいつは名を名乗り出した。鳳フワンと言つらしい。

鳳が俺の名も教えろと言つ。ここで、俺は初めて気が付いた。



自分には名前が無い。いや、有った様な気もするが、きっとそれは自分の名前ではない。

答えられずにもっていけば、鳳は不安げに顔を覗き込んでくる。何故？そんな顔をするのだろうか？

彼女がそんな顔をする理由が、解らなかった。それから、何か名を示すものは無いのかと言われ、適当にポケットをまさぐる。

突っ込んでいた手が掴んだのは、小さな鎖の付いた、楕円形の薄い小さな銀板。

それを鳳に渡す。受け取った彼女が読み上げる、理解できない文字の羅列。

だが、それを聞いた瞬間、頭の中にすつと言葉が浮かび、いつの間にか口走っていた。

アッシュユ、と

それが何を意味するのかは、もちろんわからない。だが、妙にしつくりとくる。欠けていた何か、ピッタリと当て嵌るような感覚だった。

だが、ただそれだけ。それ以上の事は何も無い。

凰が、俺の事を『アッシュ』と呼んだ。他に自分を示すようなものは無い。なら、丁度いい。名無しよりは増しだろう。

しばらく歩いて、ファンの行きたがっていた所にたどり着いて、凰とは別れた。

それからまたしばらく歩いてる時だった。

いきなり頭の中に響く耳鳴りの音。それと、煩わしさを伴った鈍痛。

同じだ。呼ばれている

こめかみを押さえながら、今まで流されるだけだった人混みを掻き

分けるようにして進む。

ぶつかろうとも構わない。早く早く早く

急かされる様な、満たされる様な感覚。

大通りに出て立ち止まる。すぐさま視線は頭上に広がる青天へ。

「来る」

耳鳴りも頭の鈍痛もより一層激しくなる。足りない何かを補う様な、共鳴し、引かれ合う様な感覚へと変わる。

不意に、空に炎が現れる。空の色とは少し遠いだいぶ遠いはずの地<sub>こ</sub>上<sub>こ</sub>からでもはつきり見える、蒼色の炎が3つ。

炎はこちらの近くまで隕石のように落下してきた。

消えた炎の中から現れたのは、3メートル近い怪物。

一匹は、骨のような白い体に、鋭そうな黄色い爪や角。

残りの二匹は、鳶の様な触手の束に、紫の外殻を纏っている。

ああ、そうだ。

即座に理解する。自分の存在意義を。自分がここにいる意味を。

理屈を超え、本能でそう感じ取る。

あれは倒すべき敵だ。自分にとっても。世界にとっても。

気付けばまた、知らないはずの言葉を口走った。

「アインスト

」



## 敵 二人目の男（前書き）

約2カ月ぶりの投稿（汗

今回はいつもより少し短いです。

たったこれだけを書くのに2カ月も掛けるとかホント鬱だ……。。

## 敵 二人目の男

訪れた静寂。 緊迫した空気。

人で賑わっていたはずの大通りも、今や蜘蛛の子を散らしたかのよう  
うに、人影は見当たらない。

ただ、中央を除けばの話だが。

怪物。

あるいは化物と、それを見た者なら誰もがそう言うだろう。

まるで骨のように細く、白い外殻に鋭い爪。

植物の蔦のような緑の触手が集まった体に、紫の外殻。

どちらにも、コアのように紅く輝く宝玉が付いている。

異様な圧迫感と存在感を放つそれらは、一目で敵だと解る様だった。

そして、その異形に対峙するかのように佇む一つの人影。

銀髪の青年      アッシュは、3体の怪物から一切視線を逸らさない。

見上げる様に怪物を見やる彼に、臆した様子は無い。むしろ、この状況を楽しんでいるかのようにさえ感じる。

突如、怪物が触手を鞭のようにしならせる。空気を裂きながら迫るそれを彼は横に飛んで避ける。

標的を失った触手はそのままコンクリートを打つ。轟音を鳴らしながら地面に陥没を作った。

アッシュは片手でベルトから拳銃を抜き、銃口を怪物に向ける。



躊躇なしに引き金を引くアッシュ。放たれた弾丸に怪物はよろめくが、どうやら効果は薄いらしく、その堅強な外殻には掠り傷が付く程度だった。

獣骨の怪物が姿勢を低くして、アッシュを引き裂こうと襲い掛かってくる。鋭い爪の猛攻を紙一重で避けるアッシュ。彼は隙についてしゃがんで足を払い、よろけた怪物の頭部に銃口を突き付けて零距离から発砲する。

銃弾は怪物の頭部に有った紅い宝玉に輝を入れる。途端、その怪物は唸り声を上げる。

苦しむように悶えながら、やがて怪物は頭の前から砂の様な真っ白な灰となって崩れてしまった。

「まず一匹……っ!!」

そう呟いたのも束の間、アッシュの足首に異形の触手が絡みつく。強引な力に引かれバランスを崩したアッシュはまるでハンマー投げのように振り回される。

縦横無尽に宙を飛び交ったアッシュは、勢いそのままに街道のシヨ―ウィンドに頭から投げ込まれる。盛大に響くガラスの割れる音。

二匹の異形は追い打ちとばかりに宝玉から赤い閃光を吐き出す。投げ込まれた熱は急速に膨張し爆発を巻き起こす。

巻き起こる轟音。緊迫した空気の中、濛々と黒煙が空に向かって立ち上っていた。

)

「ぐっ……」

咽返るような熱と、全身を裂くような痛みに、沈みかけた意識が叩き起こされる。

見れば、両足には複数のガラス片が突き刺さり血が滴っている。押さえていた左腕も、大きなガラスが二の腕を貫通している。

(いや、この程度なら問題ない)

頭から垂れてきた紅色によって、視界の半分を遮られながら、そこに捉えるのは相対する『敵』。

植物の蔦を思わせるその触手を両脇に漂わせながら、未だ油断なく、

見据えるようにこちらに向いている。

3匹の内1匹はなんとか仕留められた。だが、残りの2匹もそう上手くいくとは限らない。

吹き飛ばされた直後に見た光。恐らく向こうは遠距離からレーザーなりなんなり打ち込めるのだろう。オマケにあの触手。伸縮範囲はほぼ無制限だろう。

遠くから撃つのでは分が悪過ぎる。最初の1匹のように固いのかは分からないが、恐らく当たった所で効果は大して見込めない。

かといって、こんなボロボロの体で攻撃を掻い潜りながら接近し、2匹とも仕留めるのはほぼ不可能だろう。

どの道残されているのは『死』だ。

「さて、どうしたものか……」

呼覚ませ

「……」

呼覚ませ。お前の力を

「俺の・・・力・・・?」

不意に頭に響く声。急に聞こえてきたというのに、驚くと言った感情は毛ほども湧いてこない。どころか、妙にしっくりくるほどだ。

『火』は既に、お前の中に灯っている

「・・・」

まるで知っている様に、自然と右手が上がる。銃口を目前の敵に引き金に指を掛ける。

呼覚ませ。お前の器を。内なる存在を

そうだ。俺は“それ”を知っている。あとはただ、名前を呼べば、

それでいい。

呼覚ませ

「来い  
Call

」

）

阿鼻叫喚の人の波を、少女 鳳鈴音は走っていた。

「ハツ・・・ハツ・・・」

如何せん体格が小柄な彼女は、逃げ惑う人々を押しよけるようにして走る。

向かう先は、街の大通り。つい先程、住民が逃げ惑う理由が現れた場所であり、知り合った青年が向かっていた場所だった。

「一体っ……何が……」

ただひたすらに掻き分けながら、頭に浮かぶのは、あまり感情と言  
う物を現わさなかった、奇妙な銀髪の男。

「アツシュっ……」

やがて、人の波を抜ける。

彼女の眼前に広がったのは、なんとも非日常的な光景だった。

がらんどうな大通りの一角が、黒煙を吐き出しながら炎に包まれて  
いる。その火を見つめるかのように佇む、2匹の異形。

鎧のような紫の外殻に、植物のような緑色の触手。恐らくあれは生物な  
のだろう。しかし、彼女は同時に嫌悪感にも似たものを感じる。

あれは敵だ

本能に直接語りかけるような感覚に、警戒を強めながら右手に付け  
ていた黒のブレスレットに手を掛ける。

その時異形が彼女の方へ向き直り、紅い閃光を放つ。

「きゃあっ！！！！」

手前で着弾した光線は爆発し、爆風と衝撃で鈴は吹き飛ばされてしまふ。

ビルの外壁に叩きつけられ、肺の中の酸素を強制的に吐き出させられる。

異形の中心にある宝玉に、紅い光が集まりだす。

(まずいっ………!!)

痛む体を必死に動かそうとする鈴。しかし無情にも動きは依然として鈍いまま。

膨れ上がる光に死を覚悟し、両目を瞑る。

「………?」

しかし、一向にこない変化に、鳳はゆっくりと目を空ける。

「死ん………でる………?」

そう。

今まさに自分に向かって閃光を打ち出そうとしていた異形の怪物は、

その中心を穿たれ、真っ白な灰の塊へと変わり果てていた。

か細い音をたてて崩れ落ちる異形。その後方に光る“何か”を、彼女は思い知った。

揺らめく陽炎の中から現れたのは、黒い、人より一回り大きいくらいの、黒い人型。

「あれって・・・IS・・・？」

目の前に姿を現したそいつの、自分が知るものに近く、しかしあまりにも見慣れない姿に、鳳は困惑した。

まずその体格。兵器としての価値が顕著になりつつある昨今のISは、兵装を量子変換するとは言えそれでもある程度は外装部に兵器がいくつかあるものだ。

しかし、あの人型には、それらしきものは見当たらない。流線を描く黒色の装甲は、普通のISの様な兵器然とした堅い印象は無く、全体的にスマートに見える。せいぜい目立つと言ったら両肩の大きなウイングぐらいだろう。

一番不思議に思ったのが、顔面部。頭部には大方ハイパーセンサーが付くぐらいで、基本顔はある程度露出している筈だ。ゴーグルや



バイザーが付いているのを見た事はあるが、バイクのメットみたくフルフェイスと言うのは初めてだ。

体装甲と同じように黒色のメットには角の様な装飾が施され、恐らく目にあたる部分であるう、緑色の二つの光が薄く輝いている。

突然同胞を灰に還された怪物は、凶弾を放った張本人へと向き直る。

燃え盛る炎も意に介さず悠然と進み始める人型に、集束した光を放つ。着弾した熱の塊は爆ぜながら熱波を撒き散らす。

「Call Ram Rifle」

熱に囲まれた人型はただ一言“来い”と呟く。瞬間右手に光が集まり、一瞬の内にその手に一つの銃器が握られる。

そう、“銃器”だ。

まるでトランクケースか何かのような長方形。重厚な威圧感を放つ漆黒の外装フレームに付いたトリガーは、まさしく銃器のそれだろう。

揺らめく火の光に照らされ、鈍い金色に輝く銃口を異形に向け、引

鉄を引く。

二つの銃口から放たれる緑色の閃光と円錐の弾丸。2発3発と続けざまに放たれるそれは、音の壁を打ち破りながら炎を突っ切る。

放たれた弾丸は異形の右肩に命中。閃光が外殻を分解し、その下にある触手を衝撃波を伴った金属の塊が根こそぎ抉り取っていく。

片腕を吹き飛ばされてバランスを崩した異形へ、さらに追撃が撃ち込まれる。

しかし異形は倒れ込むような体制のまま、体をバネの様に縮ませその場から弾けるように飛んでこれを回避する。

空中へと躍り出た異形を、人型は目で追うようにその姿を視界に映す。

ジャコンッ

人型の持つ銃器の、バレル下のスリットから現れたのは、鉛の様な鈍色を放つ銃剣。一般の銃剣よりも少し細長いそれを構え、人型は足を曲げる。

一瞬、人型の姿がブレたかと思うと、次の合間にはその場から姿を消し、いつの間にか異形の懐にまで跳んでいた。

人型は銃剣の切っ先を異形の体に突き立てると、そのまま引き金を引く。2、3立て続けに独特な射出音が響き、異形の背面から体を撃ち破って緑色の柱が現れる。

容赦なく撃ち抜かれ、体に大穴の空いた異形は、そのまま灰の塊となって風に散らされた。

「.....」

目の前で繰り広げられた怒涛の展開に、凰は暫し放心していた。

やがて、体に負った擦り傷や火傷の痛みにも、やんわりと意識が覚醒していく。

宙空から降り立った人型は、じつとこちらを見つめている。

やがて、人型が光に包まれる。しばらくして光が止み、その場所に立っていたのは、先程会った青年　アッシュだった。

アッシュは、ふらついた足取りで1、2歩進むが、体勢を崩しその場に倒れこんでしまう。

「!?!アッシュっ!!」

ハツとし、凰はアツシユの元に駆け寄る。すると、アツシユの体が淡く光り出す。先程よりも強い光に思わず目を瞑る。

そして、その光も止む頃には、アツシユの姿は綺麗サツパリ消え失せていた

）

陽の光がとうの昔に傾き始めた頃、私は学園内の廊下を歩いていた。放課後と言う事もあって人が疎らになっているせいか、吐いているヒールの音が廊下に響く。

「まったく・・・一夏め。勢い余ってグラウンドに突撃するとは・・・」

あいつがぶっつけ本番にはそれなり強いことは理解しているが、だからと言って基礎がガタガタではこれから先やっていけないだろう。

当然、私はグラウンドの修繕を一夏に命じた。練習時間よりも修繕時間が増える事が無いよう祈るが、幸いにして、一夏の周りには実力者が何人かは居る。

見えていて多少ハラハラするが。人間関係的な意味で・・・愚弟が間違っただけは起こさないようにとも祈っておこう。

「と・・・着いたか」

廊下の一角で足を止める。

そこは保健室。何でも私に相談したい事があるらしい。

「（あいつから相談というのも珍しいが・・・）卯月先生、織斑です」

・・・。

・・・反応が無い。

「・・・真琴、私だ」

「・・・やはり反応が無いな。試しにノックもしてみたがさっぱりだ。」

まったく・・・自分で呼んでおいて不在とは。微妙に抜けてる所は相変わらずだ。仕方ないので勝手に入ってしまったおう。

「入るぞ」

居ないと解つていてもやはり言ってしまうものだな・・・。

扉を開けて中に入ると、消毒用アルコールの保健室独特な臭いが鼻につく。見回してみても、やはりそれらしい人影は無い。

「まさか忘れてるなんてことは無いだろうが・・・。仕方ない、ここで待つか」

思い立つや否や、私は棚からカップを取り出し、ヤカンに水を入れて火にかける。

少々不躰だとは思うが構うものか。ベッドを見たが誰かが寝ている訳でも無し。

何よりあいつと私の中だ。この程度の事で一々腹を立てる事は無いだろう。

ピイイイイーーーーッ!!!!

「つと……」

コンロの火を消し、粉末を入れたカップの中にお湯を注ぐ。それをスプーンで掻き回せば、香り立つ湯気が立ち上る。

口をつければ程良い苦みが口の中に広がる。

「……ふう……」

息を吐き出し、緊張の糸を解いていく。もうあれだな、勝手知ったる他人の家だな。ここは家ではなく保健室だが。

「にしても遅い……本気で忘れてるんじゃないかな?」

かれこれ10分近くはたった。もしかしたら入れ違いになった可能性も否定できない。

「……仕方無い。一度戻るか」

カップを流し台に置こうと立ち上がる。

その時私は、信じられないものを見た。

光。

そう光だ。眩い銀色の光が、部屋の中心で輝いていた。

徐々にその光は形を変え、やがて人の形になる。

そして、その光が治まった時、そこにいたのは銀髪の髪の男だった。

「・・・何・・・なんだ・・・こいつは・・・」

しかし、私の疑問に答えてくれるものは誰もおらず、眩きは空しく消えるだけに終わった。



## 敵 二人目の男（後書き）

・・・はい。如何だったでしょうか？

とりあえず全国の千冬さんファンの皆様すいませんでした。私の小説内のイメージでは千冬さんはちょこっただけ傍若無人なんです。

そして戦闘描写・・・これが戦闘だと！？片腹痛いわ！！

最初はもっと長く使用とも考えていたのですが、私情により鬱憤が溜まりに溜まっていて気力的に限界だったのでこんな感じになりました。

ちなみに今話は、時系列的には“鈴が転校するまでの数週間の内”というイメージでお送りしています。

ではでは〜

## 開幕 転入生（前書き）

はい、どうも白眉です。

今回は短いです。ちょく短い。まったく先に進まなくていらつとします。

でも、区切りのいいところって言ったたらこのくらいかな？と思って投稿しました。

それでは、どうぞぞ〜

## 開幕 転入生

みなさん、こんにちは。卯月真琴です。

日中如何お過ごしですか？麗らかな春の陽気に照らされながら、恋人と桜並木を歩くななんて、なかなかロマンがあると思いませんか？

・・・私ですか？私はですね

」さて、どついう事が説明して貰おうか？」

絶賛、阿修羅あしゅらと対峙中です・・・。

あれは数分前の事。

所用で学園を離れていた私が、保健室に帰ってきて最初に目撃したのが、床に倒れ伏してたあの男の子と、それを見て困惑してる千冬ちゃん。

私を発見した千冬ちゃんは、私の胸倉を掴んで激しく前後にシエイキング。珍しく狼狽してる千冬ちゃんによって、私の内臓器官も激しくシェイキングされて。

そこにちょうど愛香ちゃんが来ちゃったから、千冬ちゃんはますます顔を赤くしちゃって。

気持ち悪くなる寸前で、愛香ちゃんの鶴の一声で事無きを得たわけなんだけど……。

男の子はベッドで安眠中。愛香ちゃんはとりあえず椅子に座り。千冬ちゃんは私の前に仁王立ちで。私は一人だけ正座と言う状態。

（なんなのこの状況！？私何かした！？）

……ああ、したわね一応。

今日の星座占い、最下位だったもの……。

閑話休題。

「で、空から落ちてきたあいつを取り合えず治療したと・・・」

「先ず千冬ちゃんへの説明は済んだけど、さすがの千冬ちゃんも参つてるみたいね・・・。呆れと疲れが入り混じった様な表情をしてるわ。」

まあ、私や愛香ちゃんも詳しい事を知ってる訳じゃないから、しょうがないんだけどね。」

「本来ならお前達の頭を疑ってかかる所だが・・・目の前で見せられたんではな」

「織斑教員も信じてくれるんですか？」

「“も”と言うと・・・ああ、こいつか」

「ちょっと!?“こいつ”は無いんじゃないの!？」

冷めた目でこっちに視線を移した千冬ちゃんに抗議する私。

それを見て、愛香ちゃんは苦笑していた。せめてフォローぐらい入れて欲しいんだけど・・・。

「まあ、お前が嘘をつく様な人間じゃない事は知っているしな」

「……ありがとうございます」

「別に、礼を言う必要など無い。さて、こいつをどうするかだが……」

途端、難しそうに思案顔になる千冬ちゃん。

「ああ、それなら良い案があるわ」

「「?」?」?」?」

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。宣戦布告に来たわ」

両腕を腰に当て、小さく笑みを漏らす鈴。

今、二人の少年少女は再会を果たす。

「何かツコ付けてるんだ？すげえ似合わないぞ？」

もっとも、感動の再会や波乱の予感と言った類は、少年 織斑一夏  
の一言で早々にぶち壊しとなった訳だが。

「久しぶりなのに第一声がそれ！？せつかくキメたのに空気ぶち壊しじゃない！！」

ギヤイノギヤイノと捲し立てる鈴。

対する一夏はと言えば、何故自分が責められているのか理解できないといった表情だった。

「おい」

「何よ!?!」

興奮冷めやらぬまま、声のした後方へと振り向く鈴。

瞬間、彼女の頭頂部に強烈な打撃が叩き込まれる。

黒革の薄い長方形。角には金具による簡素な装飾が施され、面の部分には“1年1組 担任：織斑千冬”と銘打たれていた。

ようは出席名簿である。

「いつまで入口を塞ぐ気だ? さつさと教室に戻れ」

その出席名簿の持ち主たる人物 織斑千冬は、宛ら阿修羅のごとき厳格な空気を醸し出しながら、鈴の後ろで腕を組んで仁王立ちしていた。

鬼に金棒、織斑千冬に出席簿。と言った具合である。

「ち、千冬さん……」

「馬鹿者。織斑先生と呼べ」

「す、すみませんっ!」

蛇に睨まれた蛙よろしく、鈴は千冬に気圧されてドア前から退いた。



弱肉強食を思わせる、野生の世界の縮図の様である。

「くっ……また後で来るからね!!逃げないでよ一夏!!」

へっぴり腰だった鈴は、体勢を立て直して一夏に指を向ける。が

「さっさと戻れ」

「は、はいっ!!」

結局、鈴は脱兎の如く自分の教室へと走り帰って行った。

「なんだったんだ……?つかあいつIS操縦者だったのか?」

ふと、率直な感想を口走る一夏。

だがそれが不味かった。

「……一夏?誰だ今のは?知り合いか?ずいぶんと親しそうだったか?」

「一夏さん?さっきの事はどういう関係で?」

クラスメイト 篠ノ之箒とセシリア・オルコットの両名から、妙に凄みの聞いた質問をされる一夏。二人は笑ってはいるが、逆のその笑顔が怖い。

そんな二人の質問を口火に、他のクラスメイトから質問と言つ名の言及が一夏へと集中する。

つまり、彼女達は驚異たる存在を忘れていた訳であり。

「とつとと席に着け、馬鹿ども!!」

出席簿<sup>鉄鑑</sup>が等しく、全員の頭へと振り下ろされる結果となった。

かくして、この日も変わらず、学業と訓練の1日が幕開けようとしていたのだが。

「まったく……山田先生、お願いします」

「あ、はい。解りました」

千冬に促され、つい先程まで入口付近でうろたえていた副担任山田真耶が、教壇へと上がる。

「えーっと、今日はSHの前<sup>ショートホーム</sup>に、皆さんに転入生を紹介します!!」

彼女の一言で、教室内がざわつく。

転入生!?

ウチのクラスに?

そんな情報聞いてないけど・・・

てかこの微妙な時期に転入生？

「騒ぐな！！」

混沌とし始めた教室内が、千冬の一喝によって静まり返る。

「あはは・・・それじゃ、入ってきてください」

教室中の視線が入口に集中する中、ドアが横引きに開かれた。

入ってきたのは、男子用の制服を着こんだ、長身の男。

後頭部の辺りで括った銀の髪を揺らしながら、彼は教壇の横に着く。

教室内を見渡す翠緑の双眸はからは何の感情も読み取れず、機械的な表情だった。

首に付けた黒革に金の装飾を施したチョーカーが、陽光を反射して鈍く光る。

所定の位置に着いた彼は、しかしその口を固く閉ざし、一向に何も喋ろうとはしない。

教室内が、先までとは違った沈黙に包まれる。

「……あ、あの……自己紹介を……」

「……アツシュ、自己紹介だ」

居た堪れない空気を破る山田と千冬の声に、黙っていた青年は口を開く。

「アツシュ・ホワイトだ。これからここで厄介になる」

本当の意味で、波乱の幕開けを予感させていた。



## 開幕 転入生（後書き）

・・・はい。

如何だったでしょうか？

彼の名前は“アッシュ・ホワイト”に決定しました。  
次回辺りでこの名前にした理由を説明する予定です。

一応“アッシュ”って言う名前にも由来はあるんですよ？  
この作品の原作に選んだ作品と、彼の武器から連想されるキーワードから、解る人には解ると思います。

試しに“アッシュ”で検索してみると解るかも。

転入生は世界で二人目の男性操縦者。

果たして彼の正体は？

そして真琴の考えた『いい案』とは？

こんな次回予告調で、一先ず区切りたいと思います。

ではでは～

## 黒い影魔（前書き）

はい、どうも白眉です。先にESを更新しました。

戦闘描写は得意じゃないよ。だから今回は長いです。前の話の短さに反発したかのように長い。でも話自体はさして進まない。

今回はルビの嵐でした。妙にルビ振りたくなるんですが、これって中二・・・？

ではでは、どじろ〜

## 黒い影魔

「さて・・・覚悟はいいな？」

ここは、IS学園内にある、訓練用アリーナ。時刻は既に0時を回り、上空からは満月が、見下ろすようにその光を降り注ぐ。

しかし、そんな真夜中の静寂とは対照的に、アリーナには照明と防護障壁が張られている。

そして、アリーナ内部にて、対峙する影は二つ。

一つは、鈍銀の装甲に覆われた、鎧武者を思わせる機体 『打鉄』  
。その搭乗者たる人物、織斑千冬は、右手に一振りの近接用ブレードを構え、対岸に位置する標的を見据えている。

対するは、漆黒。深い闇を思わせる様な全体的に黒を基調としたカラーリングに、何よりも異質に思える、フルフェイス式の頭部装甲。緑色の双眸が捉える視線の先は傍目からは窺えず、どこか不気味ささえ感じさせていた。



「選考方法は今から10分間、模擬戦の結果によって判定する。操作技術、咄嗟の判断力、冷静な対応能力、その全てが問われる。戦闘は、どちらかが降参を申し出るか、エネルギーが底を尽きた時点で終了と見なす。異論は無いな？」

彼女の問いに、漆黒の機兵は無言のままゆっくりと頷く。

「よし……卯月先生、お願いします」

千冬がオープンチャンネルで、管制室に居る卯月へと呼びかける。

「それじゃ、行くわよ……試験、開始っ!!」

（1週間前）

「「学園に転入させる!？」」

「ちよつと・・・二人とも声が大きいわ」

同タイミングで放たれた両者の言葉に保険医 卯月真琴は耳を塞いだ。

しかし、聞いた二人からすれば、その提案は全く予測していなかった物だけに、かなりの衝撃となった。

「真琴、お前自分が何を言ってるのか解っているのか？」

「愚問ね。伊達や酔狂でこんな事言ったりしないわ」

「で、ですが卯月教員・・・彼をこの学園に転入させるというのは、かなり無理があるのでは？」

そう。 “学園” と名が付くとは言え、ここIS学園は文字通りIS インフィニット・ストラトスの専用機関とも言える。

正体不明の少年、ましてISを扱うことすらできない “男性” を、おいそれと入学させる道理は皆無だろう。

が、そんな二人の反応を予測済みだとも言うように、真琴は口端を吊り上げて楽しんでいた。

「何なんだその顔。腹立つな、殴るぞ？」

「まあまあ千冬ちゃん落ち着いて。．．．私自身も結果を聞いた時は半信半疑だったのよ」

「結果？何のです？」

首を傾げる愛香に、真琴は一転して気落ちしたように溜息を吐き、二人へと振り返った。

「彼、恐らくはIS操縦者よ」

「！？」

告げられた言葉に、信じられないと言った表情になる千冬と愛香。

「．．．．真琴、それは本当なのか？」

「この子が付けてるチョーカーがそうなんじゃないかと思ってね．．．  
・連絡を取って確認して貰ったら、案の定だったってわけ」

「じゃあ彼は、世界で二人目の男性IS操縦者．．．」

「そう言う事になるわね」

発覚した事実の大きさに、今は眠りに着く少年へと3人の視線が集中する。

「・・・しかし、ならばなぜ、この学園に転入させる事になるんですか？」

ふと、愛香が疑問を口にする。

「・・・ねえ、愛香ちゃん。彼をここに連れて来た時の事、覚えてる？」

「ええ・・・夜中に、血塗れの彼を連れてこの保健室に・・・」

「実はね、あの時の彼には、目立った外傷なんて一つも無かったのよ」

「!？」

そう。愛香が少年を連れてきた時点では、少年の体には傷痕さえ無かったのだ。

しかし、彼が来ていた衣服に付着していた血は、紛れもなく本物だった。少なくとも直に触った愛香と真琴に関しては、これについては疑いようもないだろうと思っている。

ではなぜ？今でこそ安らかに眠る少年は、血塗れでこの地に落下してきたのだろうか？

「一つ、辻褄の合う考え方があるわ」

あくまで仮説だけど、と真琴は付け加えるのを忘れずに、その内容を語る。

「つい最近、深夜に中国の上空で、未確認の反応が観測されたそうなの。2、3日はその反応が続けてたらしいんだけど、急に現れた別の反応と衝突。そのまま纏れ合う様に領空から消え去ったそうよ」

「もし、ここに居る彼とその未確認反応アンノウンに、何らかの接点があるとしたら？」

「……………っ!?!」

「…………彼は、そのアンノウンと戦っていた？」

言わんとしていた答えに辿り着いた愛香に、真琴はコンロの方へと足を運ぶ。

カップを二つ用意しながら、「だいぶ飛躍した話なんだけどね」と楽観的な声で返す。

しかし、部屋の中の空気は反して重苦しいものとなっていた。

「……学園長にこの話は？」

「ほんの一部分しか話してないから、半信半疑だったみたいけど……まあ、了承はしてくれたわね」

「条件は？」

「間髪いれず切り返す千冬に、真琴は苦笑しながらカップへと湯を注ぐ。」

「一週間後に試験を行い、それに合格すること。試験官は私の方から選出する」

「おい真琴、お前まさか……」

「そのまさか、よ」

「試験官は、千冬ちゃんにやってもらおうわ」

「織斑教員にですか!？」

「ええそうよ。ちなみに、他の先生に頼むつもりはないから」

真琴の決断に口をはさむ愛香。しかし、真琴に取り合うつもりは無いらしく、愛香は続く言葉に「の句を紡ぐ。」

「・・・妙な所で頑固なのは変わらん。対策はあるんだろうな？」

「もちろんよ。この1週間の間は、愛香ちゃんに基礎内容をみっちり叩き込んでもらうわ」

「ええ！？私ですか!？」

本人の了解も無しに進行しようとする真琴の判断に、狼狽する愛香。

「大丈夫よ 愛香ちゃんならきつと上手くやれるから」

「で、ですが・・・」

「一通りの学科教程は修了しているし、丁度良いじゃないか御白。せつかくだから期待させてもらうぞ?」

「織斑教員まで・・・」

~~~~~

(試験・・・か)

飛んでくる弾丸を回避しながら、アッシュは仮面の下で思考する。

目を覚ました場所は、見知らぬ場所。

その場にいた人達から、自分の置かれている状況を聞かされた。

(IS・・・女性にしか扱えない特殊兵装)

それを、自分は扱う事が出来る・・・らしい。もっとも、自分にはそんな実感など無いのだが。

(妙な気分だな・・・あの時とはまた違う)

思い出すのは、一番最初の戦闘。

(何故・・・俺は名前を知っていた?)

あの異形と相対した時に口走った単語、“アインスト”。

不揃いだったパズルの欠片が、ピッタリと嵌った様なあの強烈な感

覚は、今でも覚えている。

(俺自身と何か関係が・・・?)

不思議と言えば、あの時の声もそうだ。

装着しているこの機体も、あの時の声に気づかされた結果だ。

(駄目だな・・・何も思い浮かばん)

飛び交う単語に頭の中は煩雑とし、不明瞭感を拭うには至らない。

キンッ

不意に耳に響く、独特の金属音。

「考え事か？余裕だなっ!!」

どうやら弾丸に被弾したらしい。衝撃と肩を撃たれたという感覚に一瞬バランスを崩す。

生じた隙を相手が見逃す筈も無く。千冬が腰溜めにブレードを構えて一気に接近してくる。

(まずいつ!!)

危険を察知し、アッシュは右手のライフルを盾代わりにして構える。

ガギインッ

鉄と鉄がぶつかり合い、火花が散る。

横薙ぎに振るわれた斬撃を何とか防ぐも、その勢いまでは抑えきれず、下方へと押し飛ばされてしまう。

「くっ!」

地面と激突する前に縦回転ロールで態勢を立て直す。

先程まで自分がいた空を見上げると、既に相手の姿は無い。

「どこを見ている」

「っ!」?

真横から掛けられた声に、慌てて方向を変えると、視界に入るのは逆袈裟に振るわれた銀の刃。

咄嗟の事に防ぐ術もなく、ダメージと剣圧で今度は後方へと吹き飛ばされる。

アッシュは距離を取る為にそのまま上空へと飛ぶ。

すかさず千冬は、左手に別の武器を転送する。

微細な粒子を纏って現れたのは、黒塗りの自動式拳銃。オートマチック

デザートイーグルと呼ばれるマグナム　もちろんIS用に調整・
開発された兵装である　を、2発3発と続け様に発砲する。

アッシュが飛来した弾丸を回避したのも束の間、再び千冬がブレードを構えて急加速する。

しかし、さしものアッシュも三度目の失態を演じるつもりはなく、
ライフルのスリットから現れた銃剣を構え、迎え撃つ。

ガギャリッ

鏢迫り合いの様に打ち鳴らされる刃と刃。

四方八方から襲い来る銀光を、返す刃で防ぎ、いなす。数回にわたる斬撃の応酬の後、互いの刃を弾いて、両者は距離を取った。

「……もつと本気を出したらどうだ？」

不意に、千冬がアッシュを見据えながら、威圧するよう言い放った。

「……」

対して、アッシュはその問いに答えない。否、答える事が出来ずにいた。

(本気？それでも精一杯やってるんだがな……)

操作技術、戦略性。どれにおいても、今の自分と相対する彼女とでは、差があり過ぎる。

しかも、向こうの方こそ本気を出していない。精々良い様に弄ばれている程度だ。

自分の底さえも知れないというのに、底の知らない相手にどう本気を出せというのだろうか？

アッシュの頭の中は、より一層の混迷を極めていく。

そんな時、オープン回線を通して彼の元に通信が入った。

アッシュ

「愛香……」

ハイパーセンサーによる仮想ディスプレイに、自分を助けてくれた少女の顔が映る。

君は勝ちたいのか？

「・・・」

思い悩むのも解る。頭の中に晴れない靄があるのは、誰しも不快に思うものだ。

ディスプレイ越しにこちらを見ている筈の彼女の眼は、まるで直接射抜かれているかのような力強い瞳だった。

だがこのままでは、君は負けるぞ？負けてしまえば、何も残らない。何もな。

異様な重圧と、一瞬差した暗い影を伴った彼女の言葉は、真っ直ぐに響いてくる。

だから。今はただ、勝つことだけを考える。勝つためにはどうするか、最善の方法は何なのか。ただそれだけを。

暗鬱としてい筈の心に、最早陰りは見当たらない。

1週間と短かったが、最低限、その答えを見つけ出す方法を、私は君に教えた筈だ。

だから、勝て。悩むのはその後だ。

「・・・了解した」

「待たせたな」

「もういいのか？」

「ああ・・・ここからが本気だ」

「それでいい・・・行くぞっ!!」

再びブレードを腰溜めに構え、千冬が一直線に突貫してくる。

対するアッシュは、ライフルを後方に構え、迎え撃つような体制を取る。すると、銃剣から緑色の光が放たれる。刃の延長線上にまで伸びるその光は、一種の光剣の様でもあった。

下段から迫る斬撃を、振り下ろす光剣によって迎撃する。

パキインッ

「っ!?!」

一層甲高い音を響かせて、千冬のブレードの刀身が宙を舞った。

すかさず、アツシユは彼女の眼前に銃口を突き付ける。

「面白いつ!?!」

そう言うやいなや、首を逸らして弾丸を避けた千冬は一時後退。

右手を宙空にかざすと、粒子が集まりだし、一つの“器”を形作る。

現れたのは長柄。十文字槍と呼ばれる、左右に鉤を持った穂先を宿す、4 m前後の長槍だった。

「行くぞ・・・!?!」

両手を柄に添え、刺突の構えを持って直進する。

構わず発砲するアツシユ。しかし、千冬は多少の被弾は諸共せず突進してくる。

ガキインツッ!!

再び火花を散らしながら、金属音が鳴り響く。

「ハアツッ!!」

凌いだのも束の間、横薙ぎに振るわれた十文字が、銃剣を弾く。千冬は振るった槍の勢いそのままに、さらに一回転、今度は上段から振り下ろした。

アツシユは急に来た別方向からの攻撃にも喰らい付き、これを防御。払い除けてすぐさまライフルを放つ。

しかし千冬はこれを後退しながら回避。今度は上昇して上からの刺突を仕掛ける。

「っ!!」

ギリギリでこれを回避するも、そこから更に返す刃で逆袈裟に振るわれた斬撃がアツシユを襲う。

半身でかわすアツシユ。装甲に掠れる刃が彼の中で不安と焦燥を煽った。

(不味いな……)

状況は、アツシユにとってあまり良いものとは呼べ無くなってきていた。

武器を一つ破損させたは良いが、新たに選択されたその兵装は、予

想以上の障害となった。

特筆すべきはブレードの倍以上はあるそのリーチ。

剣で対峙していた時よりも、より速く、より変則的な乱打が飛んでくる。距離を詰めようとすれば阻まれ、空けようとすればすぐさま追いつかれる。

さらには隙を見て撃つても、手の中で回すことで盾にもなる。実に凡庸性に富んだ武器と言えた。

ライフルの弾丸も無限と言いつ訳にはいかない。火力の高い兵装も、この膠着状態では隙が大き過ぎる。

(何か打開作は?・・・)

しかし、明らかに不利だと解る状況でも、彼の思考には“諦める”という言葉は浮かばなかった。

そんな時ふと、ヴィジョンの隅に表示されている物が目に入る。

(後付装備・・・?)

後付装備とは、ISが本来持ちえる兵装“基本装備”^{プリセット}以外で、IS内^{イコライザ}に存在する電子容量の拡張領域^{パススロット}に量子変換されている兵装の事である。

現在彼が開いたウィンドウに表示されている項目は二つ。

(！これなら・・・っ！！)

それに勝機を見出したのか、彼の表情には喜色が浮かんだ。

「ガンスレイヴー！」

彼の掛け声と共に、装甲背面部にあった突起が射出される。

数は4つ。銃器を模した小型のそれは、小さな羽根で不規則な軌道を描きながら飛び交い、銃弾をばら撒いて弾幕を形成する。

「ちいっ！！」

突如現れた4機のビットに、千冬は距離を取って応戦する。

しかし、まるで意志を持っているかのように飛び交うそれは即座に千冬に追従し、弾丸を吐きながらその動きを阻害する。

だが、彼女もただ手を拱いてるだけではない。

鷹の目を思わせる鋭い視線は、飛来する鉄の塊を避けながら、飛び回るビットを追い続ける。

描かれる軌跡、銃弾を撃ち込むタイミング、それらから予測される軌道を演算・算出していく。

「そこだっ！！」

体を軸にした回転による十文字の一閃は、逆風の軌道を描く。銀の光が下から上へと移動する瞬間、飛行していたビットの1機がまるで吸い込まれるように、その銀閃の射程範囲に飛び込んだ。

当然、ビットは一刀の下に両断され、爆散する。

(まず一つ!!)

予測が的中した事に千冬は内心で確信を得る。

ISの第3世代兵装『BT兵器』。操縦者との精神感応と3次元的空間把握能力により、兵装の複数同時展開と全距離対応を可能とするという破格の兵装である。

しかし、この兵装には重大ともいえる欠点が存在する。

それはビットの制御にかなりの精神負荷が掛かるからだ。思い通りの軌道を描くなら余程の集中力を必要とするし、それが2機以上ともなれば尚の事。

ビットの制御に意識を傾け過ぎれば、必然操縦者は隙だらけとなる。コントローラー

先日の試合において、自分の弟が未熟とは言え代表候補生に実力で迫ったのはそこに気づけたからだ。

が、今相對している少年はどうだ？攻撃頻度は減ったものの、距離を空けながら時折隙を突いてこちらにライフル弾を見舞ってきてい

る。

4機ものビット兵器を制御しながら攻撃できるようなとんでもない奴など、千冬は2人ぐらいしか知らない。

おまけに相手は記憶喪失。確かに戦闘技術は大したものだがそれとこれでは話が別だ。

では一体どういう手品なのか？ 答えは単純。アッシュには精神負荷が“掛かっていない”のだ。

（特定パターンを元にした管制制御か、或いはISコア自体が制御を行っているか）

千冬はビットの動きに特定の周期を元にした規則性がある事を見出した。回避行動と観察を続ける内にそれはハッキリしていき、一撃を当てたことで確信に変わった。

（ビットは恐らく時間稼ぎのための罠だな。本命は別の何かか？）

さつきからアッシュの左手に集まっている光が気になる。時間が掛かっている所を見ると高火力の兵装を転送しようとしているのか？

何はともあれ、ビットの行動パターンは把握した。操縦するのは久しぶりでも、全て叩き落とすなど造作も無い。

（詰めが甘い。少し拍子抜けだな・・・）

落胆し、少しだけ顔を俯かせると、千冬の目がさらに鋭さを増す。

攻守の逆転。狩る側は狩られる側へ。

千冬は槍を構えるとスラストを吹かし一気に加速、アッシュへと一直線に突き進む。が、残りの3機がそれを許すはずも無く、ビットはすぐさま彼女の前に立ちはだかる様に飛び、弾丸を放つ。

「邪魔だつ!!」

迫り来る弾幕を避けようとせず、むしろ自分から突っ込んでいく千冬。避けれるものは避け、回避できないものは槍でいなすか、薄皮一枚の被害で済ませる。

そうして弾幕を抜け切ると、槍を横薙ぎに一閃。3機のうち2機が無残に切り裂かれる。

残りの1機が負けじと応戦しようとするも、既に前方に敵の姿は無い。

「これで最後」

声は上から。照準を合わせる間もなく、最後のビットが槍に貫かれる。

破碎したビットを切り捨て、刺突の構えを持って一気に距離を詰める。その間数瞬。しかし、未だアッシュはその手中で新しい兵装の精製中だ。二人の視線が、一瞬だけ交錯する。

「終わりだ」

死刑宣告に等しい淡々としたセリフ。それは数秒後に起こる状況を容易に想像させる。

神速を持って放たれる必殺の一撃。この場に居た誰もが、試合終了だと思った。

ただ一人の例外を除いて

ガキインツ!!

「なっ!?!」

千冬は今まさに起きた事態に驚愕する。放たれた銀閃は確実にアッシュに届いた筈だ。しかし、手応えは全く無く代わりに有るのは明らかに阻まれたという感覚のみ。

O x t o n g u e R i f l e . I n s t a l l C o m p l
e t e

「ギリギリではあったが・・・賭けには勝ったみたいだな」

電子音声と、ヴィジョンに表示される一文。

呟いたアッシュの手に納まっているのは、一丁のライフルだった。

奇しくも槍の様に長い銃身を持ったそれは、彼の機体色とは正反対の真白な装甲に包まれている。

「勝つただと・・・？随分図々しい事を言うな」

「事実だ。勝たせてもらうぞ」

瞬間、アッシュは槍を弾きライフルを前方へ。

奥底に鉛煌めく二連装の銃口を突き付けられ、背筋の凍るような思いをする千冬。すぐさま後方へと緊急回避。

トリガーが引かれると、上段のバレルから鉛色の鉄塊が空気を震わせながら音速で突き進む。

（なっ！速い！？）

方向転換しようにも間に合わず、ここに来て初めて直撃を受ける千冬。

着弾した瞬間に炸裂した火薬と音の壁ソニックブームによる衝撃が全身を揺さぶる。

（この衝撃・・・徹甲弾か？）

徹甲弾とは、戦車や戦艦の装甲を貫くために開発された弾丸であり、それが至近距離から音速を持って叩き込まれるなど想像を絶するよ

うな衝撃である。

事実、先の一撃は打鉄に“絶対防御”の判断を下させるほどの物だった。

(油断したとはいえ一撃で4割持つていくか・・・命中精度も高い) 打鉄のエネルギー残量は既に50%を下回っている。徹甲弾発射の反動を利用して後退していたアツシユとは幾分距離が空けられてしまっている。

このままもたつていれば持久戦に持ち込まれる可能性が高い。アツシユの機体は打鉄とはほぼ真逆に位置する様な遠距離戦主体だ。銃撃戦においてはどう考えても分が悪いのは千冬の方である。

(少々大人げない気もするが・・・最速で叩かせてもらおう!!)

イグニッション・ブースト
“瞬時加速”

という技術がある。

一度外部へと放出したエネルギーを吸収・圧縮し、それを一気に放出することで爆発的な加速力を得るといふものだ。

スラスタから一時的に放出されたエネルギーは、再び還元・凝縮されることで密度を増す。

その、トップスピード圧縮したエネルギーを一気に解放することで推進速度は一瞬にして最高速に達する。

それはまさしく電光石火。爆発的に膨張した“力”による0最低から最10上への転換を果たした機影は、周囲の目に瞬間移動したかのような錯覚を起させるっ！！

構えは先程と同じ刺突。しかし、槍を扱う上では単純だが、それ故に最強の一手とも言える。

速さとは重さ。最速最短の要素を持って繰り出されるそれは紛れも無い切り札ジョーカー。さらに瞬時加速によるエネルギーまで上乘せしたこの一撃は、先の徹甲弾と同等、否、それ以上の破壊力を生み出す。

今度こそ仕留めた

千冬は勝利を確信する。この一撃を避ける事も、防ぎきる事もアッシュには無理だと。

しかし、事ここに至って、千冬は自分の認識が甘かったと、判断を誤ったと思い知らされる。

刺突を繰り出す直前、千冬はアッシュの顔を視た。フルフェイスの装甲に覆われた筈の視線。その先が捉えているのは彼を襲う槍の先端ではなく千冬だけ。

しかし送られてくるのは、勝利を諦めない不屈の闘志に燃えた様な

ものとは真逆の、目的を遂行するためだけに造られた機械の様な、底冷えする様な冷徹な視線。

勝利することだけを考えているのではない。勝利する事以外の考えを捨てた、人間性の無い瞳。

そこから先の出来事は、まるでコマ送りの様に彼女の視界に映る。

不可避の速度で放たれたはずの銀閃は、しかしアッシュのメットに掠める程度に収まった。

Convert · Revolver Stake

実は、アッシュはこの一撃を予測していた。

1週間のうちに愛香から教え込まれたISの操縦技術とそれにまつわるテクニク。そして、織斑千冬の戦闘における代名詞にして得意技とも言える技術を。

だからこそ、瞬時加速による超加速を見ても然したる動揺も無く、また千冬が武器を槍に持ち替えた時点で、ある程度の見当はついていた。

卓越した操縦技術と一気に加速する手段、それから導き出される最良の一手。

しかし、長所は同時に短所とも言えるのだ。千冬が誤認していたのは、アツシユに　　否、人間に見切れる様なスピードでは無いという部分だった。

止めの一撃で繰り出されるだろう一直線の軌道を予測していたアツシユは、予測どおり放たれた銀閃を前に踏み込む事によって回避する。多少掠る程度など予測の範疇だ。少なくとも彼にとっては。

装甲に覆われた右腕を粒子が包みこみ、新たな“器”を形作る。

現れたのは銀色に光る釘のように鋭利な鉄塊に、赤と白のコントラスト。

巨大な弾倉リボルバーを備えた、不釣り合いな杭打ち機パイルバンカー。

「王手だ」
チェック

その一言と同時に、銃声が響く。撃ち込まれたバンカーによって、空間が弾けた。

瞬時加速によって生じた推進力は、突如反対方向から発生した衝撃によって一気に反転。

成す術も無く、体を後方に引っ張られる様な感覚を感じた千冬は、次の瞬間にはアリーナの壁に叩きつけられ、クレーターを作っていた。

周りから向けられる視線に耐えながら歩く。

内容は好奇心4割私がここに居ることへの疑問6割と言ったところか。

(やはり急に尋ねたりするのは不味かったか・・・)

1年の階に3年生が来ればこうなるのも当然か。1年1組の面々を妙に緊張させてしまった。

2年の階だったら何人かは納得するかもしれないが、生憎と私には新入生の知り合いは少ないのだ(居るには居るが会いに行った教室には居なかった)。

「さて、確か食堂に行ったんだっただか？」

時間は12時10分。ちょうど昼時だ。

親切に(しかしどこかのほほんとした口調で)教えてくれた生徒の言によれば、彼は織斑君に誘われて共に食堂に行ったらしい。

考えてみれば、織斑君にとってはこの学園で唯一の(男は彼以外にも居るがそれは今の内容とは関係ない)同性だ。織斑君が彼を誘ったのは私にとっては僥倖だった。

上手く馴染めているのかと言う余計な心配も、どうやら杞憂に終わりそうだ。

そんな事を考えながら、私は一路食堂へと足を運ぶ。ぶっちゃけた話、私も昼食はまだだったので好都合だった。

~~~~~

巡って来た順番によって、券売機の前へ。買うのは無論、鯖味噌定食660円。

食券を渡してから僅か数分足らずで、おばちゃんから定食を乗せたトレイを受け取る。

「さてと・・・じゃ、それ終わったら行くから。ちゃんと空けといてよねー夏「ん？」

丁度聞こえてきたのは、快活そうな女の子の声。

視線を移せば、丁度探していた人物と、それ以外に何人かが混じって円卓を囲んでいる風景だった。心なしかあそこの机周りの席ががら空きなのは偶然だろうか？

人数は5人。

黒の短髪は言うまでも無く織斑君で、その両隣りに陣取っているの

は黒と金の長髪。

前者は少し薄めの黒髪をポニーテールにして纏めて居る人物　篠ノ之君だ。後者は金の長髪を一部縦ロールにしている。1年生で織斑君と接点のある人物と言う事は、多分セシリア・オルコットなのだろう。お互いなぜか牽制し合う様な緊張状態に見えるのは、多分私の気のせいだ。

それから、織斑君の向かい側に座る、茶髪のツインテールの少女。どうやら先ほどの声の主は彼女らしい。こちらからは背を向ける形になっているので顔は窺えないが。

そして、素知らぬ顔　と言うか無表情で鯖味噌を食べている銀髪は、件の人物　アッシュだった。

ああ、何故だろうか。

私は別に占いに詳しい訳でもないが、なぜか織斑君に女難の相が見える。後黙々と鯖に箸を入れているアッシュが恐ろしく場違いに感じて仕方がない。

とりあえずは声でも掛けようとして、その時ちょうど席を立った茶髪の少女と目が合った。

交錯は一瞬。そのまま彼女は一瞥もくねることなく食堂を去って行った。

「俺の意志は無視か・・・」

「一夏、もちろん特訓が先だからな？」

「私たちはあなたの為に時間を割いているという事をお忘れなく」

「解った解った・・・あ、なあ。良かったらアッシュも付き合ってくれないか？訓練」

「むぐ？」

鯖味噌を咀嚼しながら織斑君の方を向くアッシュ。行儀が悪い。

「教えてくれる奴は多い方が良いし、アッシュのISがどんなのか興味あるし。駄目か？」

「んぐ・・・俺で良いなら」

「そうか。そりゃ助かる」

あっさりと承諾し、アッシュは再び鯖に箸を伸ばす。と言うか

「真面目な話の時は箸を止めるアッシュ」

「ん？」

「あなたは・・・」

「御白先輩？何でここに？」



何でって・・・織斑君は私がここに食べにくるのは可笑しいとも言つのか？

「ここ、座っても良いか？」

「ああ、どうぞ」

とりあえず了解を得て、私は織斑君達の輪の中に入った。

「愛香か。どうかしたのか？」

「どうかしたも何も、私は君を迎えに行っただよ。食堂の場所など知らないだろうと思ってな。まあ、どうやらその必要は無かったみたいだな」

「先輩とアツシユは知り合いなんですか？」

「知り合いと言つか、彼はウチの会社のスタッフなんだ」

苦笑しながら口に出すのは、当然ながら真っ赤な嘘だ。

彼の入学に至って、私と織斑教員、卯月教員の間で決めた設定と言つのは以下の3つ。

・アツシユはウチの・・・と言つか私の父の会社であるホワイトグループの技術研究部のスタッフであるという事。

・彼がISを操縦できるという事実は、つい最近まで極秘事項扱い

だったという事。

・私はその彼の保護監察役を会社から任されているという事。

一応会社や学園側にはこの内容はほぼ浸透させてある。1週間で済ませるといっては中々骨が折れる作業だったが。

最後に關しては、会社からではなく、織斑・卯月両教員から直々に言い渡された事である。

ちなみに、父の会社であるホワイトグループは、ISその物の生産は行っていない。やっているのはエネルギーバイパスや集積回路、より効率的なAIの開発や、IS用の兵装開発。それに伴う量子変換インスタによる拡張領域占領率の最適化の研究。

以上がIS関連でやっている事で、どちらかと言えば他の分野の方が幾分か進んでいる方だ。ISの開発に關しては他の企業ほどではないし、元々の技術開発の方針を最近ISに向け始めたにすぎない。

取り扱ってる範囲は広く、規模もそれなり。

能力主義者の父に言わせれば、『男尊女卑や男女差別を謳いだした頃から世界は可笑しかった』らしいから、女尊男卑の象徴とも言えるISも単なるビジネスの一環に過ぎなかったのだろう。

閑話休題

説明も大雑把に済ませ。箸を進めながら話し出したのは、この前の織斑君とミス・オルコットの試合の話。

内容は、試合内容がどうか、彼のIS“白式”がどうか、篠ノ之君の特訓が役に立ったとか、オルコットの“ブルー・ティアーズ”の事とか、そんなオチの付かない様な話だ。

ふと、そこで私は話題が上がった箸の人物が何も言葉を発してこない事に気づく。

「？織斑君。オルコット嬢はどうかしたのか？」

「へ？」

見やれば、何やらオルコットは放心したように固まっていた。信じられない物でも見た様な顔だ。

「おいセシリア？おーい・・・」

「・・・」

「「「「「？？？」「」「」

何かしら呟いたかと思うと、顔を俯かせてオルコットは私の両手を握ってきた。

「あなたが、“あの”御白愛香さんですのっ!?!」

・・・おおう。

よくは解らんが、顔を上げたオルコットの満面の笑みだった。瞳は爛々と輝いてる。星とか見える位に。

「君が“どの”御白愛香の事を言ってるかは解らないが、確かに私の名前は御白愛香だが・・・?」

「私貴女に憧れていたんです!再びお会いできるなんて光栄ですわ!!!」

な、何やらすごい威圧感だな。他の皆の腰が若干退けてるぞ。かく言う私もそうなのだが。

「・・・なあ、アツシユ。先輩って、そんなに凄い人なのか・・・?」

「いや、知らん。篠ノ之は何か知っているか?」

「私に聞くなホワイト・・・。私だって知らん」

「貴方達何もご存じないんですの!?!良いですか!?!この方は若干15歳でアメリカ代表に選ばれた最年少代表操縦者なんですのよ!

「！」

オルコット嬢は声を荒上げて、3人に宣伝する。

「ア、アメリカ代表!？」

「?すごいことなのか?」

「いや、そりゃなあ・・・」

「一国の誇りを一身に引き受けるのだから、十二分に凄い事だが・・・」

「でも途中で辞退されてしまったと聞きましたけど、一体どうしてですか?御白さんの実力でしたら二人目の『ブリュンヒルデ』として歴史に名を刻むのも夢では無かった筈ですのに」

4人の視線が、私に集中する。

「否・・・あの・・・」

何故だろう。

ハッキリと答えれば済むはずだ。なのに私は、二の句を継げずにいる。

自然と、顔が俯いてしまう。

ヤメロ

「愛香？」

「先輩？」

「御白さん……？」

急に黙ってしまった私を、皆は心配してくれたのだろう。様子を窺おうと顔を覗き込んでくる。

ダメダ

「私……は……」

目の奥がチカチカする。喉の中がカラカラだ。頭の中はクラクラする。視界はユラユラと揺れてきた。

こんな顔、見せられない。見せたくない。

ミルナ

見られたくない。















「ハツ・・・ハツ・・・ハツ・・・」

気付けば荒い息のまま、いつの間にか自室に戻っていた。

## 黒い影籠（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？

今回の話は、アッシュが学園に入学する際の試験の様子と、それからちょこつとの日常、あと風呂敷広げ過ぎ感の漂う伏線撒きをチラホラと。

今回はアッシュのISの初期装備と後付装備として取り出した兵装の紹介を。（多分ネタバレ含む）

・ツイン・ラウムライフル

後継機に“黒くて光る素早いあいつ”の名前を付けられた彼の初期機体の兵装。劇中ではラウム・ライフルとして表記しています。この兵装は銃剣もオミットしているのもっぱら近く中距離用の兵装。長距離射撃には向きません。

・ガンスレイブ

後継機に（ry 今作では精神制御ではなくあらかじめプログラミングしたパターンによる攻撃と言う事にしました。こちらへんの細かい設定とかは公式が意外とザルなので大変でした。

・オクスタン・ランチャー（Oxtongue Rifle）

言わずと知れたエクセ姉様の愛機のあれ。こちらはヴァイスちゃん  
が狙撃機体なので当然遠距離用。本来は零距离でぶっ放すようなも  
んじゃないんだぜっ！！

・リボルビング・ステーク（Revolver Stake）

鋼の狼の代名詞。シャルルと武器が被る？気にするな。私は気にしない。

ぶっちゃけアッシュのIS近接兵器が少な過ぎんだもん。

とまあ軒並み活躍した兵装の紹介でした。

今話書いてる途中で思ったのが、ISの公式設定や裏設定で、結構スカスカなのが多いんですね。それとも今後の間で発表するだけか？

おかげで途中の“瞬時加速”と“最年少”のくだりがかなり悩みました。一回出してまた吸収ってなんだよ！？スラスタ―にただ溜めるんじゃない？何でそこで働く力が“慣性エネルギー”なわけ？PICで慣性をほぼ無効化してるんじゃないのか？年齢のくだり何か最悪全話消してからの練り直しすら考えた。

ネット内の原作者の評価とか見てみたら結構エグイ……。

さてはて、こんな感じに不安が残る今話でしたが、下手すると次話投稿は来年になってしまいかも……。

次の更新予定はとあ重！！多分おもくそ長くなるよ！長くするよ！リリなのは現在重々煮詰め直し中……。

ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8940s/>

---

IS インフィニット・ストラトス 胡蝶の夢 人の夢

2011年10月28日03時12分発行